

一 闡 提 攷

水 谷 幸 正

- 一 問題の所在。
- 二 原語的名義の整理。
- 三 思想的背景の系譜。
- 四 大乘涅槃經における諸相とその意義。
- 五 宝性論等における取扱。
- 六 結語。

一

永い仏教の歩みにおいて、それがいかに人間の精神生活を支配してきたか、それによつて有形無形の影響を東洋文化にいかほど与えてきているか、ということ、言い換えるならば仏教の歴史的効用の尺度測定ということが現在の仏教学、東洋学の勝れた成果となつて次々に発表されている。そして過去の仏教の極めて偉大であつたことが、周人のひとしく認めるところとなつてゐる。

ところで、仏教は哲学であり、思想であつて、文化学一般を網羅するものであると共に、いうまでもなく宗教そのものに外ならない。宗教であるからには、人間の個人的主體的生の問題を根本の中心におくものでなくてはなるまい。今後の仏教がいかにあるべきかの道しるべもこの基本的路線の上に設定されなければならない。したがつて過去の仏教解

明にあたつても、仏教文化とか仏教思想とかという、いわば一般的抽象的な学問研究の領域から更に一步つき進めて、より具象的な人間そのもの、すなわち、宗教としての仏教を受容し仏道を実践する主体的な人間の具体的なあり方、あるいはそれらの人々の生活状況の基盤をなす社会若しくは教団（サンガ）といわれる集団構成組織の具体的な姿が如何ようであったかを明確にしなくてはならない。いかにすぐれた仏教の教法が解明されようとしても、それに基いて実践する人々の側も同時に明かされなくては仏教の如実な歩みを知ることが出来ないし、また将来への課題も語る事ができない。のみならず、仏教思想そのものをも適確に把握することは困難であろう。

たしかに、仏教思想史によつて明かされている諸教義はすべてかかる観点から研究され、もたらされたものである。しかし、その殆んどは仏教に順応する側から、言いかえれば仏教を如法に実践する正法流布の発達展開の立場から観られたものであつて、当然そこに内包されていなければならないアンチ的なもの、すなわち非仏教徒（仏教を否定し、仏教の展開を阻碍するもの）の具体的な究明については詳しくふれられていない。仏教の歴史を如実に知り、その思想を正しく理解せんが為にはどうしてもこの面をなおざりにすることができない。「一闡提」の研究を採り上げた第一の意義がここにある。

「一闡提」とは *Iochanika* の音訳であるといわれ、「斷善根・信不具足・極欲・多貪」などと意識されている。すなわち、仏道を修行すべき善根がなく、無信心であり、現世への欲望が強くて因果の理法を否定し、仏法を誇り戒律を破るいわば極悪人のことである。かかる極悪人が仏教思想史中、いかなる意義をもつて登場してくるのかを明確にすることによつて、仏教思想の正しい姿を反顧することが可能である。したがつて、この問題は仏教展開のふしぶしを構成したものの、すなわち克服さるべきものとしての契機を与えた「危機思想」と密接な関係がある。これについてはさきに「大乘涅槃經典群にあらわれたる危機思想」「仏教における危機意識の一考察」において詳しく考究したところである。^①そこで論じておいたように、大乘涅槃經において、壞法無道者の代表として「一闡提」を登場せしめ、仏教的人間（護

法持戒比丘」と非仏教的人間（一闡提）のありようを、正法に連らなるべき主体的危機思想として提示している。この危機思想の決定的な断面は、具体的な「一闡提」という人間をさらに深く掘り下げて究明することによって、詳しく示現することが出来る。ここに攷究の第二の意義がある。

仏教の究極目的が「成佛」にあり、その理論的根拠として「仏性・如来蔵」説が立てられている。ではこの極悪人たる一闡提に仏性が有るか、無いか極めて重要な問題となる。したがって、鳩摩羅什門下の竺道生によって主唱されて以来、「闡提成仏」が術語化され周知されているように、仏教思想中においては特に仏性思想との関連において説かれている場合が多く、一闡提とは仏と成るべき資格の無い者、すなわち無性有情（無仏性者、無種姓者）を指している。一般に理解されている。無性の闡提がどうして成仏し得るかについては、道生以来多くの仏教学者が苦心して論証しているところであり、中国・日本の仏性思想展開の中心課題がここにあったといつてよい。これを十分に解明するには、仏教原理としての仏性・如来蔵の思想を究明しなくてはならないことは勿論であるが、一方において忽そかになりがちであった「一闡提」について十分にその内容が究明されなくてはならない。攷究の第三の意義がそこにある。

さらに思想的にみると、そのほかいろくく究明されなければならない大きな課題を含んでいる。たとえば、(一)原語的な意味はどうか。(二)いかなる経典や論書において術語化してくるのか。(三)元来いかなるものを指して呼んだのであるか、また具体的にいかなる人々を指しているのか。(四)彼等の非仏教的活動の実態はいかようであったか。(五)こういう問題が採り上げられた時代の教団内の事情、あるいは当時の社会相を何ほどか物語っているのではないか。(六)これに類似した他の用語、たとえば魔破句とか五逆者、誹謗正法者、邪定聚、無種性とかが言われるものとの関連性はどうか。(七)そこに浄土教的契機を語ることができるかどうか。など寔に重要な問題を孕んでいる。すでに学者によつてかかる問題にある程度の解決が与えられているが、主としてその原語の意味および仏性思想との関連という点に究明のメスが加えられているにすぎない。本論では、一闡提の思想的意義を体系的に論究することによつて、如上の問題を順次解き

ほゞしてゆくことを期求するものである。

二

一闡提が *Icchanika* の音訳であることは *Ratna gotra vibhāga* 『宝性論』や *Lankavatāra sūtra* 『入楞伽經』によって確めることができる。^⑤ この *Icchanika* の語義については荻原雲来博士によつて詳しく論述されており、また仏教大辭彙には多少異なつた見解を呈出しているので、それらを整理しながらその意味を明かしてみよう。荻原博士によるならば、この語は梵語より転訛したところの一種の俗語であつて、梵語の *ītham* (副詞)「かくて、かくのごとく」より生じたものである。またパーリ語 *īthatta* (抽象名詞)「かくのごとき状態、現狀、現世」という語は梵語の *ītham* に抽象名詞の後接字 *ta* を附加して構成された語である *īthanitva*, *īthatva* とさうのと同じうと論じている。この梵語の用語例は殆んど見当らないが、パーリ語文献にはかの有名な釈尊得証の文として

khīṇā jāti vusitaṃ brahmacariyaṃ Kāmaṃ Karāmiyaṃ nāparaṃ itthattāvāpi pajānāti.

生は尽きた。梵行は成就された。作すべきことはなされた。他のかくの如き状態(今のこの世と同じ状態)に行くことはない。

我生已尽 梵行已立 所作已作 自知不受後有

の文がニカーヤなどの諸処にみられる。^⑥ その意味するところが「現世、現狀、現実態」であることはこの文より明らかである。また語の構成より考えるならば、さきの梵語の形より推してゆくと、パーリ語では *īthatta* と、*īthanta* (*īthanta*) という二種の形となることができよう。この後者すなわち第二種の語形に、撰属を示す形容詞の後接字 *ika* を加えれば、*īthantika* と変形する。さらにこれが他の俗語に転じて *ecchanika* 又は *icchanika* となつたものであり、それが仏教梵語として採り入れられていったものであろう。その意味も、現世主義の、快樂主義の、此の状態を可とするところの、という形容詞となり、さらに転じて直ちに名詞として用いられるようになった。したがつて一闡提の根本

的意味は順世外道 (Lokayata) のとき、かくあると主張する自然主義的な物質論快樂主義者、現世主義者を指すものであると荻原博士は主張する。

しかし、この語を直ちに梵語としてみるときは、iccha (希求する、欲樂する) という動詞の語根に ant 又は ant の現在分詞の語基構成音を加えて icchant となし、これに ika の名詞構成音を附加して icchantika となつたものであるか、あるいは iccha (願望、欲望、望求) という名詞より造形されたものであるとなすことができる。この場合その本来の意味は願望する人、欲望ある人、ということになる。中国の訳経者は概ねこのような梵語として解釈している。玄奘音義に「言ニ一闍底柯^①此云ニ多貪^②謂貪ニ樂生死^③不^④求^⑤出離^⑥故不^⑦信^⑧樂正法^⑨」と解義して「多貪」と翻譯しているのがそれである。因みに icchantika の音訳は一闍提のほかは一闍底迦、一闍底柯、一顛底迦、一闍提迦を当て、略して闍提と称することは周知のところであるが、多貪のほかは樂欲、極欲、大貪、多欲と訳しているところに、icchantika の本義を推すことができる。チベット語でも h-tod chen (pa, po) (甚欲、大欲、多欲のもの) と訳しているから中国的理解と通ずるものがある。更にこの icchantika を断善根、断善法、信不具足、燒種、無種性、極悪などと訳しているのは、彼等が現世の欲樂に執着し、仏道に背反する行為に貪着しているという点を特にとり上げて義訳したものであろう。大乘涅槃經 (四十卷本) 卷二十六に

「一闍提輩若遇^①善友諸^②仏菩薩^③聞^④說^⑤深法^⑥。及以不^⑦遇俱不^⑧得^⑨離^⑩一闍提心^⑪。何以故。断^⑫善法^⑬故。……………善男子。一闍名^⑭信。提名^⑮不^⑯具。不^⑰具^⑱信故名^⑲一闍提。仏性非^⑳信衆生非^㉑具、以^㉒不^㉓具^㉔故云何可^㉕断。一闍名^㉖善方便。提名^㉗不^㉘具。修善方便不^㉙具足。名^㉚二闍提。仏性非^㉛是修善方便。衆生非^㉜具^㉝以^㉞不^㉟具^㊱故。云何可^㊲断。一闍名^㊳進。提名^㊴不^㊵具。進不^㊶具故名^㊷二闍提。……………一闍名^㊸念。提名^㊹不^㊺具。念不^㊻具故名^㊼二闍提。……………一闍名^㊽定。提名^㊾不^㊿具。定不[㋀]具故名[㋁]三闍提。……………一闍名[㋂]慧。提名[㋃]不[㋄]具。慧不[㋅]具故名[㋆]二闍提。……………一闍名[㋇]無常善。提名[㋈]不[㋉]具。以[㋊]無常善[㋋]不[㋌]具足[㋍]故名[㋎]二闍提。……………以[㋏]断[㋐]生得[㋑]諸善法[㋒]故名[㋓]二闍提。」

と説いているのは、いかにも非インド的な而も論書的内容を持つものであり、一闍提の意識のいわば極端なものである

うが、しかし仏教的意義を加味しているという点を取除くならば梵語としての *śi icchā* を語源とする一闍提の意味を十二分に含んでいることを察し得る。しかも、*Lankāvatāra sūtra* には^⑩

Tatecchantikānāṅ punar mahāmate anicchantikā mokṣe kena pravartate

とあり、大乘入楞伽經の相当漢訳には七卷本では^⑪

「復次大慧、此中一闍提、何故於_二解脱中_一不生_三欲樂、」

十卷本では^⑫

「大慧、一闍提者無涅槃性、何以故、於_二解脱中_一不生_三信心不生_四入_五涅槃、」

四卷本では^⑬

「大慧、彼一闍提非_二闍提、世間解脱誰轉、」

となつてゐる。この経説より勘案するならば、*anicchantikā* が、七卷本では「欲樂を生ぜず」と訳されており、十卷本では意を汲み取つて「信心」という語を使い、四卷本ではただ「非一闍提」となつてゐるにしても前後の文章よりするならば、この語は欲樂しないものの状態を指すものにほかならない。したがつて *icchantika* は梵語より構成された用語であるとみなければ、ここの梵文は解釈し得ないであろう。*Mahāvīryūpatī* に甚欲とか大欲と訳してゐるよう^⑭に、仏教梵語としてはやはりこのように解釈するほうが穩当であろう。もちろん荻原博士の見解も無視することはできないし、この用語が仏教教団内で術語化された時代のインド一般の思想状況を考えるならば、当然顧みられなくてはならない提言である。そこで思想的考察よりする意義はともかくとして、先づ原語の意味としては、一闍提とは現世の快樂に貪著するものと定義づけることができる。

なお、窺基の「成唯識論掌中樞要」卷上本に一闍提迦、阿闍底迦、阿顛底迦の三種の闍提を説いてゐるが、これらは無着菩薩造という玄奘訳の「大乘阿毘達磨集論」^⑮に基づくものであり、玄奘音義によるならば、阿闍底迦とは「此云_二

無欲^一謂^二不^レ樂^三欲^四涅槃^一……不^レ信^二樂^三正^四法^一旧言^二阿闍提^三訳云^二隨意^三作^一也」と解し、阿顛底迦とは「此云^二畢竟^三謂^二畢竟^一無有^二善心^一也」と釈している。窺基も「枢要」^⑧で「阿闍底迦とは、樂欲の義、生死を樂うが故に、と釈しながら、阿闍底迦については、これ不樂欲の義、涅槃を樂わざるが故に、と云い、阿顛底迦については、名づけて畢竟となす、畢竟して涅槃の性なきが故に、と釈している。一闍提を中心とするこれら三語の意義については次節で触れるにしても、他の二語の原語の意味はどうであろうか。阿毘達磨集論にその用語がみられ、しかも音訳語を用いている点からして、中国製でないことは確かである。両語ともあるいは俗語、俗音として、すなわち *icchantika* の訛音として、類似用語的に術語化されていったものかもしれない。阿闍底迦の原語は *acchantika* 若しくは *antichantika* であろう。前者が *itthantiva* から構成される *aithantivika* の訛音であるといひ、あるいは *acchantika* から転じたものであろうかなどといわれるが、いずれにしても *icchantika* の否定語であることには疑を容れない。したがって、「欲樂せず」という意味は正しい、といえよう。次に阿顛底迦は *atyantika* の音訳語であるとみるならば、*atyanta* から作られる「不変の、究極まで続く」という形容詞であるから、「畢竟の義」という意味もまた正しいといえる。しかし、この語もまた *aithantivika* の訛音の相違に依るものではないかとも考えられるが、その場合には「畢竟して」という義が成り立たないから、確実な根拠を類推することはできない。ともかく、一闍提が類似用語を派生しつゝ、インド仏教思想内において採りとげられておつたこと、しかも多種多様の意義がその内容に盛られていたためであろうか中国への伝播が音訳語を主にしていたことを知り得るであらう。

三

結論からさきに云うならば「一闍提」の用語は大乗涅槃經において正式にとりあげられ、喧伝されていったものといえる。何故ならば、經典成立史、あるいは仏教思想発達史の面から考察して大乗涅槃經成立時代以前の成立と見做され

ている經典論書にその用語を見出すことができないからである。因みにこの用語は南伝系統の經論には全く見出し得ない。したがって一闍提思想出現の基盤を、北伝仏教の、しかも大乘涅槃經成立の時代、地域、社会的教団的背景という一局面において、求めることができよう。しかし、かゝる用語が表面化し、その思想が典型化していくその背後には、永い思想史的展開があつたであろうことを当然顧みられねばならないし、その顧慮を述べけ解明することによつてこそ、はじめて「一闍提」の名義を十分に把握することができる。

釈尊在世時代の提婆 (Devadatta) や阿闍世 (Ajatasattu) あるいは央掘魔羅 (Angulimala) など仏道に背反する悪人の行状については伝記に詳しいところである。就中、提婆は仏に逆く極悪者の代表的資格を備えさせられている。ことに釈尊の教説に反対し、教化の邪魔をし、教団に迫害を加えたという仏伝中における提婆の悪玉性の伝記的意義、史実的考証については別に考察を加えなければならないが、ともかく既に根本教団においてアンチ仏教徒の存在が詳しく語り伝えられていることは、単に思想上の対立とか、人間の心の迷いを表現したものであるということだけにとどまらず、具体的な人間の仏教反逆の行為を語るものとして注目しておかなければならない。

また、釈尊入滅直後に、これによつて仏の教誡にわづらわされることなく、放逸をむさぼることが出来るといふ、仏教非難の暴言を吐いて、いわゆる第一結集開催の直後の原因をなさしめたという須跋陀羅 (Subhadda、跋難陀ともいふ) の言行も、仏滅後の原始教団における最初の (仏教の側からいふ) 邪悪者として、そのような存在のあつたことを看過することができない。さらに、原始教典や律典によく語られている、上座部、大衆部の根本分裂をはじめ諸々の枝末分裂という史伝のモメントを与えている諸比丘の活躍や、第二結集以後の諸結集という物語によつて残されている初期教団内の対立乃至統一化の状況中における持戒や破戒の敘述、あるいは他のインド一般諸思想との関連における護法や謗法の記述なども、一闍提思想にたらなるものとして挙げておかねばならないであろう。たとえば、それが歴史的事実であるかどうか、あるいは諸種の伝記の相違をどのように解釈するかなどはともかくとして、かの「大天の五事」^②とか

「十事非法」^⑤という表象的説明によつて伝えられていることなどがその代表的なものである。

ところで、そのような史伝的物語における非仏教的存在者の言行が、教説との関連において当然反省されてくる。すなわち仏教思想の発達に應じて思想が体系化され教理が組織化されるにしたがつて、具体的人間を抜きにした悪行、悪言の抽象化がなされるにいたるのである。その代表的なものとして経論の諸処に散見する「魔」の思想に注目したい。

魔とは *mara* の音訳「魔羅」の略語であろうが、いわゆる悪魔のことであり、リグベータに説く人の生命を奪う死の神であるヤマ *Yama* 思想に基づくものであると言われている^⑥。そして、欲界、色界、無色界という三界思想の組織の中にとり入れられることによつて、魔天、魔王という位置づけを得るにいたつている^⑦。これが釈尊の伝記中にも採用されて登場している。かの仏陀成道時における「降魔」の説話は有名なところである。すなわち、釈尊成道の時に魔王破句が欲妃、悦彼、快観、見従の四女を遣わして、嬖亂を企てたというのがそれである。しかも、この「破句」なるものが「魔破句」などと術語化されているように常に魔王すなわち悪魔の代表者として用いられている。魔破句が仏のみならず仏弟子たちにも随逐して惑亂し、善事を妨害することは諸々の仏伝や経論に散見するところである^⑧。破句とは *pāpīyas*, *pāpīmant* の音略語であつて、「より悪い者」という意味であるから、悪者、極悪などと訳されている。バラモン教において古来より破壊の神とされているシバ *śiva* 神すなわち自在天 *mahēśvara* が破句のことであるとも云われているから、魔破句とは、やはり仏教を破壊し仏道を妨げる悪魔的な極悪者である、ということが根本的な意味であるといえよう。もちろん、魔とか魔破句とかいわれる個有名詞的な存在者があつたのではなく、雑阿含経巻九などにおいて説かれている六魔鉤（六根が六境に味着すること）、魔網、魔絹などということや、あるいは仏伝の解釈において仏道修行者の心中の誘惑、迷妄、放逸などを表象したものであろうことは間違いない。しかし、それが具体的に如何なるものであつたかについてはなお考究を要するにしても、仏に達し法を謗り僧を惑亂せしめる何らかの形あるもの、存在を予想してもあながち不当ではあるまい。一步譲つて、仏法を毀害する諸状況、諸事象を総称して魔破句となして伝える

ていつたとみるならばより穩当であるかもしれない。ともかく、魔に関する所説があまりにも多く、雑多な要素が入り込んでゐるからそれらを嚴密に整理した上でないと具体的なことを指示することが不可能であろうが、たとえば、増一阿含卷二七に説く色力、声力、香力、味力、細滑力の魔の五力や、仏本行集經卷二十五に説く欲貪、不歡喜、飢渴寒熱、愛着、加睡眠、恐怖、恐畏、狐疑、競利及争、愚癡無知、自譽矜高、恒常毀他人の魔の十二事などはたしかに自己の身心から生ずる迷妄を表象したものであるし、また雜阿含卷三十九に説く「波旬請^⑧世尊^⑨作^⑩國王^⑪」「波旬作^⑫婆羅門像^⑬、勸^⑭諸比丘受^⑮三五欲言^⑯、何為捨^⑰現世樂^⑱、求^⑲他世非時樂^⑳」「仏与^㉑三百比丘^㉒説^㉓觸入^㉔魔化^㉕壯士^㉖大身^㉗來^㉘燒^㉙乱^㉚」などの教説はたしかに魔波旬に譬えられるべき具体的な存在を推測し得るであろう。そして、迷妄の表象を内魔とし、具体的存在を外魔として二魔に分けることができる。増一阿含經卷五十一、大智度論卷五、瑜伽師地論卷二十九に説く五陰魔、煩惱魔、死魔、天子魔の四魔説は魔を組織的に明かす通途の説として有名であるが、この中前三者を内魔とみるにしても、第四の天子魔は第六他化自在天に住する正法破壊の惡魔を指すのであるから、現世における非仏教的諸活動をこの天子魔の作用と見做すならば、外魔ということができよう。一闡提につらなるものとして、この外魔の性格、はたらきを看過することができない。大乘經典においても魔に関する所説は多い。たとえば、華嚴經卷四十二に説く五陰魔^㉛乃至不知菩提正法魔の十種魔は四魔を開いたものであるが、その十種魔の撰持するところとして十事を挙げてゐる中、最後の捨菩薩行、不化衆生、疑謗正法の三事はある種の人々を予想せしめるであらうし、また声聞二乘の分別の徒輩は忘失菩提修善などの十種魔業ありと説いてゐることとつき合はずならばよほど具体的なものを把むことができる。大乘經典のうち魔に関する所説の最も多いのは何といつても般若經典群である。般若經はその成立の思想的意義からしても察し得るように対小乘意識が極めて強烈であるから、そこに云う魔とは小乘(二乘)を指してゐる。すなわち、大乘般若の深理を理解し得ず、二乗の果に執着し、二乘地に墮して増上慢心を起すものを魔となしてゐる^㉜。したがつて「魔作^㉝三仏形^㉞、為^㉟邪説^㊱」^㊲という、いわば標語的な經文の意味するところが小乘教徒であることは明瞭である。大智度論卷五にはこれを承けて、

諸法實相を除く他のすべての法を魔とし、他の利益を憎んで涅槃の道に向わない者であるといふ、さらに卷六十八には邪魔不信のもの、断善根のもの、世間の樂に深着するものなどを挙げてゐるが、小乗や外道の人々を意識しながら魔の内容づけをなしているとはいへ、こゝまで来ると一闍提思想に密接につらなり得る要素を多く見出すことができる。

このように魔あるいは魔波旬によつて説き出さんとしている教説の系譜をほぼ辿ることによつて一闍提への繋ながりを見てきたのであるが、さらに他の諸類似思想についても二、三調べておきたい。さきの大智度論にあつた「断善根者」という表現は一闍提を説明する場合にすぐ用いられる用語である。涅槃經に「何等名為一闍提二耶、一闍提者断一切諸善根」と説くように、一闍提とは断善根であり、断善根とは因果の理を撥する一切のことである、というのが通説である。俱舍論卷十七に断善根 (Kusāla-niḥsa-sannuccheda)、続善根について説く中に、因果を撥無する邪見というのがそれであるが、それは大毘婆沙論卷三十五に既に断善根と無間業の二概念に四句分別をなしつゝ、阿闍世や提婆について論及したり、断善根者を殺害した場合の罪について述べており、また成實論卷十にも断善根者が続善根になる時期について論じていることなどに基づく説であるから、それらの説を考慮に入れるならば、断善根者が一闍提へとつらなる道すじを辿ることができよう。また華嚴經卷五十一に如来の智慧も無為の深坑に墮した二乗と壞善根非器の衆生との二処においては生長し得ないと説き、勝鬘經に三乘に並んで無聞非法の衆生を挙げてゐるが、この壞善根非器や無聞非法が断善根であり、一闍提に相当し得るものといえよう。

断善根をいへばさらに続いて当然、「十悪」「四重禁」「五逆(五無間業)」などという悪業の行為の代表的な名数にふれなくてはなるまい。十悪や四重禁が戒律の根本罪として原始經典や律典に説かれていることは周知のとおりであるが、五逆について注目しておかなくてはならないのは害母、害父、害阿羅漢、出仏身血、破和合僧などといういわゆる小乗の五逆^①に対し、(1)塔寺を破壊し経像を焼き三宝の物を奪うことを人に行なわせ又はその行為を見て喜ぶこと、(2)声聞緣覺、大乘の法を謗ること、(3)出家者が仏法を修するのを妨げ或はそれを殺すこと、(4)小乗の五逆のうち一罪を

犯すこと、(5)すべての業報は無いと考えて十悪業を行ない、後世を畏れずまた人にそれらのことを教えること、という大薩遮尼乾子所説経に説く⁴⁶大乘の五逆の内容である。ここにもまた一闍提への脈絡を求めることができよう。

悪にしろ、善にしろ、或いは逆とか罪とか言われることは、いうまでもなくすべて仏道に根柢を置いて設けられた基準である。すなわち仏に成る、仏道を如法に実践するという目的に叶っているか否かが常に問われているわけである。

そこでそういう面に人々のありかたを類型化して論ずるのが定聚論である。すなわち、正定聚・邪定聚・不定聚という三聚説がそれである。この三聚説はすでに古く長阿含経卷八や增一阿含経卷十三に説かれているところであるが、古来より八別二十五説ありと云われているように定不定に約して一切の衆生を分類するについてその内容づけによつて異説区々である。この中「邪定聚」(mityāta-niyata-rāsi)といわれる人々の存在がいかなる形において捉えられてきているかがこゝで注目されなくてはならない。俱舍論では五無間業すなわち五逆をなして地獄に墮ちるものを指し、⁴⁶大智度論では顛倒を破する能わざるものなどと論じているのがその代表的なものであり、特に華嚴系統の經論疏ではその修行論に就いて詳細にこれを規定している。⁴⁸しかしその内容の具体性はともかく、要するに邪定聚とは仏道を正しく歩んでいない者、すなわち正道である仏道に背反する邪道を行うものであり、⁴⁹さきの断善根者、五逆、四重禁を犯す者をその人間の本性的なものとみなし、先天的な素質能力として規定していったものである。これは仏に成る素質資格の無い者という「無種性」agata すなわち無仏性者、断仏種者といわれるかの五姓各別論の「無性有情」につながるものであり、⁵⁰央掘魔羅経卷二に「所言邪定者、謂彼一闍提……闍提亦如是、具足十惡行、……邪定是闍提、正定是如来、住地諸菩薩」と説いているように、悪行具足の一闍提が邪定聚をそのまま指すというように考えられている場合もあるのであるから、一闍提が仏道修行のありかた、および仏性の有無に関して説かれるにいたる素地をこの邪定聚思想が与えているとみるべきである。なお、因みに、micchatta-niyata-rāsi という邪定聚を意味するパーリ語の micchatta (邪性)⁵⁰の構成が、前節で考察した icchantika の語と偶然の類似であるにすぎないということだけでは捨て去り難いもの認め

ることができよう。またそれに関連して、樂作悪業、悪中惡といわれる弥戾車 *mlecchā* 族の存在も考慮に入れておかななくてはならないであろう。⁵³⁾ しかしこれらのことについて、一闍提とのつながりを具体的に証拠づける手がかりをいまのところ得ることができない。

ところで、大乘涅槃經と同時代若しくはそれ以前の成立と考えられる諸経論で「一闍提」をとりあげているのは、さきの「悪行具足の邪定聚を一闍提となす」という央掘魔羅經と、及び不増不減經しか挙げることができない。不増不減經には、眞実如不可思議法界において滅見、増見という極悪不善の二種邪見を起すものを「舍利弗、此人以起二見因縁故、從冥入冥、從闇入闇、我説是等名一闍提⁵⁴⁾」と説いているが、片々たる經典であるから一闍提の内容についてはこれ以上知るところがない。すでに知られていた一闍提の用語を賓辭として用いているにすぎないのでなかろうか。しかし、この經典は仏滅后五百年におけるニセ沙門の悪行を説いているから、それがそのまゝ二邪見の一闍提の行爲と見做すことができよう。仏滅五百年代における悪比丘の行状については、一闍提について語っている央掘魔羅經(大正二・537c・542a・c)をはじめ、かつて論述したように⁵⁵⁾、諸法無行經卷下(大正十五・761b)、悲華經卷七(大正三・211b)、持世經卷四(大正十四・664c)、思益梵天所問經(大正十五・59a・60a)、大宝積經發勝志樂会(大正十一・520a・c・521a・b)、菩薩藏会(大正十一・263a・265b・c)、摩訶迦葉会(大正十一・512a)三律儀会(大正十一・10b)、大集經陀羅尼自在王品(大正十三・11c)、虚空藏菩薩品(大正十三・127c)、法華經普賢菩薩勸発品(大正九・61b)、藥王菩薩本事品(大正九・54a)などの大乘經典が、みな軌を一にしていわば法滅の危機を憂い、末世の正法誹謗の悪徒輩について云々しているから、そこに仏滅五百年代というある時期の教団におけるこれらの經典を出現せしめた当時の教団相、社会相を推測せしめるものがある。部派仏教時代の諸派の伝説を校勘し、仏伝の大成を企てたものといわれている仏本行集經は正法五百年像法五百年を述べて

「不生敬信 無慚愧心 管理世務 樂於諸業 所有持疑 不相諮問 各恃己能 互生憍慢 恒聚非法 諸惡知識 不善之人

以為朋友 共相狎習 圍繞遊從 是等癡人 行不純故 使彼如來 仏法僧宝 速疾隱沒 不現世間 所有經書 悉皆滅尽」
 (卷四・大正三・671b1c)⑥と説いているのがそれらの代表的なものであり、特に「無慚愧心」と言っていることは、大乘涅槃經における一闍提を考察する上に看過することのできない要素である。
 一闍提思想は右のような背景のもとに醸成されつゝあつたのである。

四

さきに一言したように一闍提を最初にとりあげ、それを仏教々団内における大問題として真向からその処置に力をつくしたのが大乘涅槃經である。大乘涅槃經においては仏教の危機思想を物語ることに実に深刻なものがあり、そこに語られる諸々の壞法無道の惡比丘達の代表者として一闍提が登場していること、しかも正法危機の現実を示現するのに一エポックを劃していること、などについては既に拙論したところである。いまは、その所論を承けて、大乘涅槃經に登場する一闍提の様相を具体的に検討していくことによつて、その思想的意義を明かすと共に、涅槃經自体の經典史的意義をも求めてみたい。

前節でみてきたような諸經論の所説を承けて、総括的に非仏教的人間のありようをもり立てていったところに、大乘涅槃經の一闍提説の特徴があるが、それは実に多岐に亙つていたので、一々その所説を聞かなければ、その内容、性格を具体的に示めることができない。また、本經において一闍提が問題化されるにいたつた起因が大乘非仏説論の抬頭にあり、したがつて一闍提とは此の經を信じない非仏説論者、阿羅漢仏教徒に対する意味であると論じられているが、これに関しても、やはり本經自らが語っているところからのみ聞き出し得るのであるから、一闍提登場の背景、誘因などについても同じく本經の説示を理解しなくては論ずることができない。したがつて、煩瑣にわたるかもしれないが、大乘涅槃經における一闍提説を先づ列挙し、その後それらを整理しながらその諸相について論攷と加えてゆきた

い。なお、かつて詳しく論じたように、大乘涅槃經典群としての諸資料の中、漢訳の曇無讖訳本（四十卷本、北本）の前十卷五品（寿命品、金剛身品、名字功德品、如来性品、一切大衆所問品）と法顯訳本（六卷泥洹經）およびチベット訳十三卷本の三本が資料的に最も中心になるものであり、大乘涅槃經の初型とみることができから、この三本を対照しながらその所説を挙示しよう。^⑧ なお、これら三本の内容を比較検討するならば、素朴な原型と考えるものが六巻本であり、つぎにチベット十三巻本を介在して、よりよく手を入れた跡の多いのが四十巻本の前十巻であるといえる。

一 闡提に關する三本對照

〔漢譯二本は大正藏經本、チベット本は北京版影印本に依つた。したがって漢本の丁數は大正藏經の丁數を示めし、チベット本の丁數は前が北京版の丁數、後のムチック字が影印本の丁數である。〕

四十卷本

(大正・卷十二)

① 陀那婆神阿修羅等、悉捨惡念皆生慈心、如父如母如姉如妹、三千大千世界衆生、慈心相向亦復如是、除一闡提。

(壽命品第一之一 371・b)

② 毀謗正法及一闡提、或有殺生乃至邪見及故犯禁、我於是等悉生悲心同於子想如羅睺羅。

(壽命品第一之三・c)

六卷本

(大正・卷十二)

魔鬼羅刹雜呪惡道、皆生慈心不相侵害如視一子、唯除一闡提輩。

(大身菩薩品第二・857・c)

(有犯戒作五逆罪誹謗正法)

(長壽品第五・864・a)

十三卷本

(北京版影印本卷三十一)

sToñ gsum gyi stoñ chen poñi jig ren gyi khams na ñkñod pañi sems can thams cad kyañ gcig la gcig bu gcig pa la bya ba bsñin du byams par byed de / hDod chen po ni ma gtogs so //

(20b, 154c)

Dam pañi chos sun hbyin pa nams tshar good pa dan bsñrad par bya bañi byir gñod sbyin gyi rgyal po lag na rdo rjes de ñar bsñan par zad kyi / Dam pañi chos sun phyuñ yañ ruñ hñod chen po yañ ruñ ste gsañ du mi ruñ ño //

(40a~40b, 162b~c)

③ (破戒毀法)

(壽命第一之三・380・c)

欲明正法犯罪應棄、以
肅將來令懷盜心者、及
一闍提輩惡心潛伏。

(長壽品第五・864・b)

④ 復有人誹謗正法甚深經典、及一闍提、具足成就盡一切相無有因緣。

(如來性品第四之一・387・a)

有謗毀經教及一闍提
輩、有是等罪不同明者
發露悔過。

(四法品第八・369・c)

⑤ 我又示現於闍浮提爲一闍提、衆人皆見是一闍提、然我實非一闍提也、一闍提者云何能成阿耨多羅三藐三菩提。

(如來性品第四之一・389・b)

或復現爲一闍提行或現
破僧、衆人悉見作無間
業、其實無有壞僧之
心。

(四法品第八・871・b)

⑥ 無信之人名一闍提、一闍提者名不可治、除一闍提餘悉治已、是故涅槃名無瘡疣。

(如來性品第四之二・391・c)

能療一切悉令離病、唯
除重病不可治者、諸佛
世尊亦復如是、除一闍
提、諸餘一切衆病悉
治。

(四法品第八・872・c)

mTshams med pa byed pa dag byan yod / mDo sde spon ba dag kyan yod / hDod chen po hi mthar thug pa hi rgyu hi mshan rid rdsogs pa dag kyan yod de / (57a, 169a)

hDsam buñ gñin la lar ni has dam pañi chos spon ba dan / hDag rid hDod chen por ston te / Sems can mams kyis kyeñ sems can hdi ni dam pañi chos spon ba dan / hDod chen paño stam du yañ dag par ses la / hDod chen pa lta bur bstan ba ni ma hoñs sems can mams kyì pñyir te / hñig rten pa ni rag tu hDod chen pa yin gyi / Sans rgyas ni hDod chen pa ma yin no // (64b, 172a)

gSor mi ruñ bañi sems can gshan rñams ni gso par mi byed do // Deñi ci pñyir she na / De dag gi nañ ni gsor mi ruñ ba yin te / De dag de bñhin gšegs pa ni gsor mi ruñ pañi nañ hDod chen pa ma gtogs pa nañ thams cad gso par mdsad de / (69b, 174a)

⑦ 解脫者名曰虛寂無有不定，不定者如
一闍提究竟不移，犯重禁者不成佛道
無有是處，何以故，是人若於佛正法
中心得淨信，爾時即便滅一闍提，若
復得作優婆塞者，亦得斷滅於一闍
提，犯重禁者滅此罪已則得成佛
(如來性品第四之二·393·b)

⑧ 一闍提若盡滅者則不得稱一闍提也，
何等名爲一闍提耶，一闍提者斷滅一
切諸善根，本心不攀緣一切善法，乃
至不生一念之善。

(如來性品第四之二·393·b)
⑨ 佛祕藏甚深經典，一切衆生皆有佛
性，以是性故斷無量億諸煩惱結，即
得成於阿耨多羅三藐三菩提，除一闍
提。

(如來性品第四之四·404·c)

眞解脫者亦復如是，非
時得者，無有是處，如

一闍提懈怠懶惰尸臥終
日言當成佛，若成佛
者，無有是處，假使信
法諸優婆塞，欲求解脫
度彼岸者，亦無是處，
沉彼尸臥，所似者何，
性非他成故。

(四法品第八·873·c)

如來藏經言一切衆生皆
有佛性，在於身中無量
煩惱悉除滅已，佛便明
顯，除一闍提。

(分別邪正品第十·881·b)

Ya mtshan shes ba ni ji ltar hdod chen pa mams kyiś hdod
chen par ltuñ ba sañs rgyas su hgyur shes bya ba ni mi srid
do // Gañ gi tshé dam pañi chos la dod ba dan ldan pa ham
dge bśan du gyur pa deñi tshé thar pa zad par hgyur ro
shes bya ba ni mi srid de / kham de ni ran bśhin gyis rmad
du byun baño // De bas na thar pa ni rmad du byuñ ba
shes byaño // ħDod chen pañi ltar de bśhin gśégs pa ni zad
pa med do // dGe bañi rśa bañi sems la dñigs pa la ni chos
rñams sKye ba med do // sKye ba med pa de ni thar paño
// Thar pa gañ yin pa de ni de bśhin gśégs paño //
(73b, 175d)

De bśhin gśégs pañi snñ pohi mdo sde chen po sten par
byed do // Sems can thams cad la ni sañs rgyas kyi khamś
yod la khamś de rañ rañ gi rus la tśhan ste / Semś can namś
kyis řon moñś pañi rñam pa zad par byas nas sañs rgyas su
bgyur te ħdod chen pa ni ma gtoġś so // (99a, 185e)

① (夫) + 不(元明) ② 懶惰一慢惰

⑩大德、如其不作一闍提者必成無礙。
(如來性品第四之四04·c)

汝今莫作一闍提輩，
自計數我當作佛。
(分別邪正品第十·
881·b·c)

⑪示有衆生於如來所生鹿惡心出佛身血
起五逆罪至一闍提。
(如來性品第四之六·416·c)

如彼調達傷壞佛身，
作無間業等乃至一闍提
輩。
(月喻品第十六·890
·c)

⑫應當如是受持莫犯、作五逆罪誹謗正
法及一闍提。
(如來性品第四之六·416·c)

現五逆罪誹毀經法，
乃至一闍提輩皆悉化現
(月喻品第十六·890
·c)

⑬犯四重禁作五逆人及一闍提、光明入
身作菩提因者、如是等輩與淨持戒修
習諸善有何差別。
(如來性品第四之六·417·c)

犯四墮法作無間罪誹謗
經法及一闍提，於正法
中作毒刺耶。
(問菩薩品第十七·
891·c)

⑭除一闍提、其餘衆生聞是經已、悉皆
能作菩提因緣。
(如來性品第四之六·417·c)

除一闍提諸餘衆生其有
聞此大般泥洹方等契
經、爲菩提因。
(問菩薩品第十七·
891·c)

dGe slob khyod hdod chen po khor na ma yim na bdag ni
sans rgyas su hgyur ro snam du soms sig / (99b, 186a)

Ma hoin pahü das kyi don du nan sems kyis / Zag phyun
bahi mtshams med pahü las bstan pahü phyr de la sogs pahü
hdod chen pahü mthap dan dge hdun gyi dben kyi chos tha
dad pa yan ston par mdsad do // (128a, 197c)

gSor ruin ba dan / gSor mi ruin ba dan / mTshams med pa
dan / mDo sde spon ba dan / hdod chen pahü mthap rnam
ston par mdsad de / (128b, 197d)

Pham pa hgyid pa dan / mTshams pa hgyid pa dan / mDo
sde spon ba dan / hdod chen pa dag kyan gdap lags na /
Gal te sems ma bskyed de mi dgos par hdsin kyan byan
chub pahü byan chub kyü rgyur hrgyur du lags na sans rgyas
kyis gsuns pa la bye brag ci ma mchis te / (131a, 198d)

hdDod chen pa ma gtogs par yoin su nya nan las hdas pahü
mdo chen po hdi rnal ma du brag par thos pa tsam gyis
kyan thams cad la byan chub kyü rgyu yod par hgyur te /
(131a, 198d)

⑮ 是大涅槃微妙經典亦復如是，兩大法
雨普潤衆生唯「闍提發菩提心無有是
處」。

(如來性品第四之六·418·a)

⑯ 一闍提輩亦復如是，雖聞如是大般涅
槃微妙經典，終不能發菩提心牙，若
能發者無有是處，何以故，是人斷滅
一切善根，如彼焦種不能復生菩提根
牙。

(如來性品第四之六·418·a)

⑰ 是大涅槃微妙經典亦復如是，置餘衆
生五無間罪四重禁法濁水之中，猶可
澄清發菩提心，投一闍提淤泥之中，
百千萬歲不能令清起菩提心，何以
故，是一闍提滅諸善根非其器故，假
使是人百千萬歲聽受如是大涅槃經，
終不能發菩提之心，所以者何，無善
心故。

(如來性品第四之六·418·a)

衆生受用此摩訶衍大乘
法雨，一闍提如雨木
石高源之地，不受菩提
因緣津澤。

(問菩薩品第十七·892·a)

一闍提輩亦復如是，於
此方等般泥洹經，雖百
千劫聞，終不能發菩提
萌牙，所以者何，如焦
穀種善根滅故。

(問菩薩品第十七·892·a)

此摩訶衍般泥洹經亦復
如是，著諸衆生五無間
罪犯四墮法濁水之中，
猶可澄清發菩提心，投
一闍提淤泥之中，百千
萬歲不能令清起菩提
因，所以者何，無善根
故。

(問菩薩品第十七·892·a)

Sems can thams cad la yan phan hdogs par hgyur ba de
bshin du mdo sde chen po hdi las dam pañi chos kyi char
ñhab mod kyi / hñDod chen pa la ni byan chub kyi rgyu
skye bar ni hgyur te skye mi srid do // (131b, 198c)

De bshin du hdod chen pa nams kyi's yoñs su mya ñan las
hdas pa chen po hdi thos su zin kyan byan chub kyi rgyu
thob pa mi srid de / De dag ni dge pañi rtsa ba zad pa yin
pañi phyir sa bon tshig pa dan pdraho //
(131b~132a, 198e~199a)

De bshin du yoñs su mya ñan las hdas pañi mdo chen po
hdi yan ka ta kañi hbras bu bshin du sems can nams kyi
phan pa nams dan mshams med bañi las nams kyi las
kyi hdam rdsab dan rñog pa gsal nas byan chub kyi rgyu la
hgod par byed de / hñDod chen pa ni ma gtogs so //
De bshin du hdod chen pa yan dge bañi rtsa ba zad cin
gsni med par hgyur ba yin pas de ni yoñs su mya ñan las
hdas pa chen po hdi lo bye bar thos su zin kyan byan chub
kyi rgyu skyed par yod ye mi nus te / De la dge ba med
pañi phyir ro // (132a, 199a)

⑮ 地一法 ⑯ 芽一牙 ⑰ 劫一 ⑱ 原一源 ⑲ 芽一牙 ⑳ 明(元)明(元) ㉑ 芽一牙

⑮ 能除一切業生惡業四波羅夷五無間罪、若內若外所有諸惡諸有未發菩提心者、因是則得發菩提心、……若聞有是經典名字、聞已敬信所有一切煩惱重病皆悉除滅、唯不能令一闍提輩安止住於阿耨多羅三藐三菩提、如彼妙藥雖能療愈種種重病、而不能治必死之人。
(如來性品第四之六·418·a~b)

⑯ 一闍提輩亦復如是、無菩提因如無瘡者毒不得入、所謂瘡者即是無上菩提因緣、毒者即是第一妙藥、完無瘡者謂一闍提。
(如來性品第四之六·418·b)

⑰ 悉能安止無量衆生於菩薩道、唯不能令一闍提輩立菩提因。
(如來性品第四之六·418·b)

一切衆生惡業重病悉能療治、若四墮法無聞罪業、及諸外道不樂菩提、聞斯方等一經耳者爲菩提因、所以者何、此摩訶衍般泥洹經一切諸惡無不治故、唯除一闍提、所以者何、無菩提因故。
(問菩薩品第十七·892·a~b)

猶如人身有傷壞處、病藥得行除衆疾病、若不傷壞肉藥不行、一闍提輩亦復如是、不可傷壞受菩提因。
(問菩薩品第十五·892·b)

成就一切諸惡之法、皆能破壞立菩提因、唯不能破一闍提惡起菩提因
(問菩薩品第十七·892·b)

Sems can thams cad kyi sdig paḥi las kyi nad nams sel bar
byed de / Pham par byed pa nams kyañ ruñ / mṭshams
med pa byed pa nams kyañ ruñ / ḥDi las phyi rol pa nams
kyañ ruñ ste / byañ chub dgos par mi ḥdsiñ ciñ sems ma
bskyed kyañ byan chub kyi rgyu skyed par byed do //
…………… gSol mi ruñ baḥi nad ananga la shes bya ba
de ni jiṭar byas kyañ gsor mi ruñ ro // De ciñ phyir
she na / De ni ḥchi bar ḥgyur baḥi nad yin paḥi phyir te /
dus ma yin par ḥchi baḥi nad ma yin no // De bshin du
ḥdod chen po yañ mdo sde ḥdis byañ chub tu gshog par mi
nus te / De ni rgyu med pa dan śi ba yin paḥi phyir ro //
(132a~b, 199a~b)

ḥDir yañ ḥdod chen po la byañ chub kyi rgyu mi skyeḥo //
De la rma shes bya ba ni byañ chub kyi rgyuḥo // Dug ces
bya ba ni mchog tu bde baḥo // Lag mḥaiṭi rma med pa lta
bu ni ḥdod chen pa sdig can yin no // (132b, 199b)

ḥDis kyañ śin du sdig paḥi las byed pa ḥdod chen pa ni
byañ chub tu gshag par mi nus te / rGyu med paḥi phyir
rdo rjes lag rul mi chugs pa bshin no // (132b, 199b)

㉑ 雖犯四禁及五無間、猶故能生菩提因緣、一闍提輩則不如是、雖得聽受是妙經典而不能生菩提道因。

(如來性品第四之六·418·b)

㉒ 一闍提輩亦復如是、雖得聞是大涅槃經而不能發菩提因緣猶如焦種。

(如來性品第四之六·418·b)

㉓ 是大涅槃微妙經典亦復如是、普雨法雨於一闍提則不能住、是一闍提周體密緻、猶如金剛不容外物。

(如來性品第四之六·418·b)

㉔ (不見者謂不見佛性)

(如來性品第四之六·418·b)

㉕ 善者即是阿耨多羅三藐三菩提、不作者所謂不能親近善友、唯見者見無因果、惡者謂謗方等大乘經典、可作者謂一闍提說無方等、以是義故一闍提

如是衆生作諸罪業、闍提摩訶衍般泥洹經生菩提因、如多羅樹斷則不生、一闍提輩亦復如是、終不能生菩提柯葉。

(問菩薩品第十七·892·b)

此摩訶衍般泥洹經普雨法雨、於一闍提雨則不住。

(問菩薩品第十七·892·b)

(彼究竟處莫能見)
(問菩薩品第十七·892·b)

其善修者謂修菩提、不來者若自不修終不自得、真實者微密勝業、如是勝業於誰不來謂一

dPer na señ ldeñ dan tin du kañi śiñ ljon pa nams ni bead phan cad sa bon tshig pa bshin du skye par mañi gyur ba de bshin du ḥdod chen pañi sens can nams kyis kyan mdo sde ḥdi lan mar du thos kyan sa bon tshig pa bshin du ḥyañ chub tu ḥkhruñ bar mi ḥgyur ro // (133a, 199c)

mDo sde chen pohi sprin ḥdi las chos kyī char ḥhab mod kyī / ḥdod chen pa la byañ chub kyī rgyu mi chags te / (133a, 199c)

ḥdod chen pa nams kyis ni dge ba byas pa ni mi mthoñ gi / sMad pa dan / bSun bañi stig pa gañ yin pa ni mthoñ ho // (133a, 199c)

Las bzai po ni ḥdod chen pa la mi ḥoñ ho // dGe bañi sens su la mi ḥoñ she na / ḥdod chen pa shes grags pa ni dge ba med pañi sens can du rgyal gyi dhan du gyur pa yin te / ḥdod chen pa de la mi ḥoñ ho // gShiñi yan lag ci

① 於一是

輩無心趣向清淨善法、何等善法謂涅槃也、趣涅槃者謂能修習賢善之行、而一闍提無賢善行、是故不能趣向涅槃。

(如來性品第四之六·418·b~c)

②⑤ 不見所作者、謂一闍提所作衆惡而不自身、是一闍提憍慢心故、雖多作惡於是事中初無怖畏、以是義故不得涅槃、喻獼猴捉水中月。

(如來性品第四之六·418·c)

②⑥ 假使一切無量衆生一時成於阿耨多羅三藐三菩提已、此諸如來亦復不見彼一闍提成於菩提。

如來性品第四之六·418·c)

②⑦ 佛爲衆生說有佛性、一闍提輩流轉生死不能知見、……………又一闍提見於如來畢竟涅槃謂眞無常、……………是人惡業不虧損故。

(如來性品第四之六·418·c)

闍提、永離善心名一闍提諸增上慢一闍提驕以何爲本、誹謗經法不善之業以是爲本、誹謗經法凶逆暴害。

(問菩薩品第十七·892·b)

不見究竟處者、永不見彼一闍提畢竟惡業、亦不見彼無量生死究竟之處。

(問菩薩品第十七·892·b)

假令一切衆生一時發意成無上道、此諸正覺猶不見彼一闍提輩諸惡究竟。

she na / mDo sde spon baḥo // De bas na ndo sde spon ba
ni ḥjigs su run ba yin te / (133a, 199c)

Gaṅ giṣ byas pa mi mthoñ she na / ḥdod chen pa sdiḡ can
gyis byas pa ni mthoñ ste / des ḥkhor baḥi mthahāi bar gyi
byas pa ni mthoñ ho // (133b, 199d)

Gaṅ gi tshē sems can thams cad sems rtsē gciḡ tu ḥthun par
gyur te bla na med pa yan dag par rdsogs paḥi byaṅ chub
mñion par rdsogs par ḥtshañ rgya bar ḥgyur srid na deḥi
tshē ḥdod chen pa sdiḡ can byaṅ chub mchog tu mñion par
rdsogs par ḥtshañ rgya yan srid pa shiḡ na / De ni byas pa
ni mthoñ ba yin te / (133b, 199d)

②⑨ 若有菩薩所作善業廻向阿耨多羅三藐三菩提時，一闍提輩雖復毀咎破壞不信。

(如來性品第四之六·418·c)

③⑩ 一闍提者名為無目，是故不見阿羅漢道，如阿羅漢不行生死險惡之道，以無目故誹謗方等，不欲修習如阿羅漢勤修慈心，一闍提輩不修方等亦復如是。

(如來性品第四之六·419·a)

③⑪ (如是說者名為惡人)
(如來性品第四之六·419·a)

謂彼諸惡業世間^①大鄙陋者，一闍提輩永離菩薩因緣功德，斯等名為世間鄙陋，於此大乘最後覺悟得為佛，名是亦鄙陋。

(問菩薩品第十七·892·c)

有似^④阿羅漢一闍提而行惡業，似一闍提阿羅漢而行慈心，有似阿羅漢一闍提者，是諸衆生誹謗方等，似一闍提阿羅漢者，毀皆聲聞廣說方等。

(問菩薩品第十七·892·c)

語衆生言，我與汝等俱是菩薩，所以者何，一切皆有如來性故，然彼衆生謂一闍提，而言如來授我等決。……
…是名似一闍提摩訶薩

De bshin du ḥdod chen paḥi sṭig paḥi las kyaṅ smad pa dan
bśun pa yin no // byan chub kyi rgyuḥi bsod nams gaṅ yin
pa de gal te byaṅ chub sems dpaṅ spoṅ bar byed na de yan
theg pa chen po la smod pa dan bśuṅ pa shes byaḥo //
(133b, 199d)

ḥDdod chen pa lod ba gcig bu dgra boom pa yin par ḥdod
pa ni lam ni zad pa chen por ḥgro ḥdod do // byams pa
dan ldan paḥi dgra boom pa yin par ḥdod la śin du rgyas pa
sun dbyuṅ bar ḥdod de / (133b, 199d)

①[大]-㊦㊧㊨ ②(言)+於㊦㊧㊨ ③[大]-㊦㊧ ④[阿]-㊦㊧ ⑤[阿]-㊦㊧㊨ ⑥決一法(佛)

也。

(問菩薩品第十七· 892 · c)

③② 有一闍提作羅漢像、住於空處誑誘方
等大乘經典、諸凡夫人見已皆謂眞阿
羅漢是大菩薩摩訶薩、是一闍提惡比
丘羈住阿蘭若處、壞阿蘭若法見他得
利心生嫉妬、作如所言所有方等大乘
經典、悉是天魔波旬所說、亦說如來
是無常法、毀滅正法破壞衆僧。……
……如是人者謂一闍提。

(如來性品第四之六· 419 · a)

③③ 彼一闍提雖有佛性而爲無量罪垢所
纏、不能得出如蠶處繭、以是業緣不
能生於菩提妙因、流轉生死無有窮
已。

(如來性品第四之六· 419 · b)

③④ 此大乘典大涅槃經亦復如是、遍入一

是惡比丘示現空閑阿練
若處、……言方等
經皆是魔說、言摩訶衍
者是諸點慧正法刺劍、
諸佛世尊皆當無常而說
常住、當知是爲毀滅正
法破僧之相、作是說者
名一闍提。

(問菩薩名第十七· 892 · c)

彼一闍提於如來性所以
永絕、斯由誑誘作大惡
業、如彼蠶虫繅網自纏
而無出處、一闍提輩亦
復如是、於如來性不能
開發起菩提因、乃至一
切極生死際。

(問菩薩品第十七· 893 · a)

此摩訶衍般泥洹經甘露

hDdod chen pa dge sloñ stig can de dgon pa nag nas śin ba
dag ſid dgra boom ba dan hdra bar rtsi par byed de / dgon
pa na gnas pañi dge sloñ namas gshan gyis pos pa mi bzod
la rkyen bshi las śin du rgyas pa ni bdud kyis smras ba yin
no // …………… Me thal bas bkab pa la bab pa bshin du
bys pa hdod chen pa namas phyis tshig par bgyur ro //
(134a, 199e)

hDdod chen po namas la yan de bshin gśégs pañi śīn po yod
mod kyi hon kyañ gyogs ma śin du stug por hdug go /
dPer na dan gyi srin bu ran nid kyis kun nas dikris te / sGo
na gtod par phvir hbyun mi nus pa de bshin du de bshin
gśégs pañi śīn po yan deñi las kyi nes bas hdod chen pañi
khoñ nas dbyun par mi nus so // (134b, 200a)

De bshin du ndo chen po hdi yan sems can thams cad kyī

①示一是明 ②者- ③刺劍一劍刺 ④

切衆生毛孔爲作菩提微妙因緣、除一闍提、何以故非法器故。

(如來性品第四之六・419・b)

⑧5 能除衆生一切煩惱、安住如來清淨妙因、未發心者令得發心、唯除必死一闍提輩。

(如來性品第四之六・419・b)

⑧6 能爲聲聞緣覺之人開發慧眼、令其安住無量無邊大乘經典、未發心者謂犯四禁五無間罪恣能令發菩提之心、唯除生盲一闍提輩。

(如來性品第四之六・419・b~c)

⑧7 所至之處若至舍宅能除衆生無量煩惱、犯四重禁五無間罪未發心者悉令發心、除一闍提。

(如來性品第四之六・419・c)

法味、一切衆生無不蒙潤發菩提因、除一闍提。

893 (問菩薩品第十七・a)

一切衆生諸煩惱患、乃至不樂菩提未發心者、悉皆能治令發菩提、唯除一闍提輩。

893 (問菩薩品第十七・a)

一切衆生聲聞緣覺、不樂菩提未發心者、悉皆療治令開慧眼發菩提心、唯除生盲一闍提輩。

893 (問菩薩品第十七・b)

一切衆生諸煩惱患、不樂菩提未發意者、及四重禁無間罪業、皆能除滅安立菩提。

(除一闍提の語を欠く)
893 (問菩薩品第十七・b)

spu dnuḍ thams cad du shugs nas dhan med par byañ chub
kyi rgyu la hjoḡ par byed de / hdod chen pa sems bskyed
pa dgos par mi hdsin pa ni ma gtoḡ so // (134b, 200a)

Sems can thams cad kyi non moḡs paḡi nad thams cad bsal
nas sems can nams byañ chub kyi rgyu la hjoḡ bar byed
mod kiy / hChi baḡi dus la bab pa lta buḡi hdod chen po
ni ma gtoḡs so // (135a, 200b)

Pham par byed pa nams dan mtshams med pa byed pa sems
bskyed mi dgos par hdsin pa nams kyan byañ chub la djoḡ
par byed mod kyi / ūin tu dms loḡ du hduḡ pa hdoḡ chen
pa ni ma gtoḡs so // (135a, 200b)

Pham pa byed pa nams dan / mTshams med pa byed pa
sems bskyed mi dgos par hdsin pa nams kyan byañ chub la
hjoḡ bar byed de / hDoḡ chen po ūi ba dan hdra ba ni ma
gtoḡs so // (135b, 200c)

⑧ 犯四重禁及無間罪臨命終時念是大乘大涅槃經、雖墮地獄畜生餓鬼天上人中、如是經典亦爲是人作菩提因、除一闍提。

(如來性品第四之六・419・c)

⑨ 若有衆生犯四重禁五無間罪、悉能消滅令住菩提、如藥革屍能消衆毒、未發心者、能令發心安止住於菩提之道、是彼大乘大涅槃經威神藥故、令諸衆生生於安樂、唯除大龍一闍提輩。

(如來性品第四之六・420・a)

⑩ 在在處處諸行衆中有闍提者、所有貪欲瞋毒愚癡悉皆滅盡、其中雖有無心思念、是大涅槃因緣力故能滅煩惱而結自滅犯四重禁及五無間罪是經已、亦作無上菩提因緣漸斷煩惱、除不橫死一闍提也。

(如來性品第四之六・420・a)

是等衆生天人中、必得發心爲菩提因、是故我說犯四重禁及無間業、皆得發心爲菩提因。(除一闍提の語を欠く)

893 (問菩薩品第十七・b)

一切憍慢四種毒蛇、犯四重禁及無間業、不樂菩提未發意者、皆悉安立於菩提道、所以者何、此摩訶衍般泥洹經、最爲無上第一良藥故、唯除增上毒蛇一闍提輩。

893 (問菩薩品第十七・b)

一切衆生聞其音聲、姪怒癡箭不樂菩提未發意者、犯四墮法及無間罪一切除愈、唯除一闍提輩。

893 (問菩薩品第十七・b)

De nas pham pa byed pa dan / mTshams med pa byed
byed pa yan dran pa ma bried pañi phras bu sems can dnyal
ba ham / Miñi hñig rten du byañ chub kyi rgyur hgyur te
/ hDod chen pa ni ma gtogs so // (136a, 200d)

hDis kyan pham ba byed pa nams dan / mTshams med pañi
las byed bañi sdig can gyi De bas na
sams can thams cad kyi bde ba bskyed pañi phyr yon's su
mya han las hdas pa chen poñi miñ sman gnod sel chen po
yon tan gyi tshul can shes bya ste / hDod chen pañi klu
drag po mi bzai pa ni ma gtogs so // (136a, 200d)

De bshin du pham pa byed pa nams dan / mTshams med
pañi las byed pa sems bskyed mi dgos par hñin pa nams
kyi yan byañ chub kyi rgyud par byed de / hDod chen pa
hehi bañi dus la bab ba dan htra pa ni ma gtogs so //
(136b, 200e)

①消=銷②能=悉③心安止=安心④提=薩⑤聲=者

④ 如法花中入千聲聞得受記前成大果實、如秋收冬藏更無所作、一闍提輩亦復如是於諸善法無所營作。

(如來性品第四之六·420·a)

④ 若比丘比丘尼優婆塞優婆夷及諸外道、有能受持如是經典、誦誦通利、復爲他人分別廣說若自書寫、令他書寫、斯等皆爲菩提因緣、若犯四禁及五逆罪、若爲邪鬼毒惡所持、聞是經典所有諸惡悉皆消滅、如見良醫惡鬼遠去、當知是人眞菩薩摩訶薩也、何以故、暫得聞是大涅槃故亦以生念如來常故、暫得聞者尚得如是、何況書寫受持誦誦、除一闍提其餘皆是菩薩摩訶薩。

(如來性品第四之六·420·a)

④ 譬如聾人不聞音聲、一闍提輩亦復如是、雖復欲聽是妙經典而不得聞、所以者何無因緣故。

(如來性品第四之六·420·b)

④ 於諸衆生有欲無欲悉能令彼煩惱崩落、是諸衆生乃至夢中夢見是經恭敬

八千聲聞於法華經得受記別、唯除冬冰一闍提輩。

893 (問菩薩品第十七·c)

若比丘比丘尼乃至外道、在在處處若書經卷爲人演說、其有衆生若讀若聞、斯等皆爲菩提之因、不樂菩提未發道意、及四重禁五無間罪、諸邪惡毒皆悉消滅、唯除一闍提輩。

893 (問菩薩品第十七·c)

不樂菩提及未發意、諸佛菩薩、方便爲說、雖

Dam pañi chos pad ma dkar poñi ndo chen po las ran thos chen po brgyad bcu dpyid zla rab la hbru rnam mthar thug pa bshin du luñ bstan pa chen poñi lo thog skye bañi mthar thug pa dan hdri par hgyur te / hDod chen po ni ma gtogs so // (137a, 201a)

dGe sloñ nam / dGe sloñ ma ham / hshims gyi mol pa gshan gyis šes sam / gShan las thos na de dag gi byañ chub kyi rgyur hgyur la / Pham pa byed ba dañ / mshams med pañi las byed pañi hbyun po dañ / Ša zañi gdon gyis zin pa ji sñed thos kyan ruñ ste / De lter gañ dag gi ndo sde chen po klags bam la bris ba klags sam / Thos sam bris kyan ruñ / De dag lta byañ chub sems dpañ sems dpañ chen por ci ste mi hgyur / hDod chen po ma gtogs so // (137a, 201a)

dPer na hon pas snra ni thos pa de bshin du hDod chen pos kyan ndo sde hdi thos par mi nus te / De la rgyu med pañi phyr ro // (137a~b, 201a~b)

De dag la rmi lam du ham hchi bañi tshe yañ ruñ te / Sems can de dag gis mi šes bshin du byan chub kyi rgyuñi

① 消一銷(宋元) ② 無一聾(元明) ③ 別一前(明) ④ (若) + 爲(三) ⑤ (演) - (一) ⑥ (輩) - (一) ⑦ (輩) - (一)

供養、喻如大王恭敬良醫、是大良醫
知必死者終不治之、是大乘典大涅槃
經亦復如是、終不能治一闍提輩。

(如來性品第四之六·420·b)

④5 譬如良醫善知八種悉能療治一切諸
病、唯不能治必死之人、諸佛菩薩亦
復如是悉能救療一切有罪、唯不能治
必死之人一闍提輩。

(如來性品第四之六·420·b~c)

④6 如來如是說大乘經典大涅槃經、為諸
衆生已發心者及未發心作菩提因、除
一闍提。

(如來性品第四之六·420·c)

④7 假使一闍提、現身成佛道、永處第一
樂、爾乃入涅槃、如來視一切、皆如
羅睺維云何捨慈悲永入於涅槃。

(一切大衆所問品第五·424·b)

④8 佛言、唯除一人、餘一切施皆可讚
歎、純陀問言、云何名為唯除一人、

不即受、而於夢中若命
終時、便自覺悟發菩提
因、除一闍提。

(問菩薩品第十七·
893·c)

悉發無上菩提之因、除
一闍提。

(問菩薩品第十七·
893·c~894·a)

能令一闍提、悉成平等
覺如來捨慈悲、永入於
泥洹。

(隨喜品第十八·896
·c)

佛告純陀、除一種人歎
一切施、純陀白佛、除

jug par hgyur ro // hDod chen po ni ma gtogs to //
(137b, 201b)

dPer na sman pa tshelhi rig byed yan lag brgyad pnyi ma
śes ba shig gis ran gi bu thog mar rgyud kyi yan lag thad
dan / Ri las skyes pañi sman rnam slob bar byed gyi ma
thog ba ni h̄dod chen po yin no // (137b, 201b)

Sems can rnamis la yan byañ chub kyi rgyur hgyur te / h̄Dod
chen pa ni ma gtogs so // (138a, 201c)

Gan tshel sdiḡ can h̄dod chen ba / Byañ chub h̄non par
rdsogs h̄chah̄ rgya / mChog tu bde ba bob nas kyis / Ņes
ba thams cad rnam sstañs pa / De tshel sgra gan zin bshin
du / De bshin ḡs̄egs pas sems can gzigs / Sems can kun
gyi mcog gyur ba / gTan du mya ñan h̄dah̄ bas groñs /
(147b, 205b)

gSol pa / Ma gtogs pa gan la gas / bkak̄ sstal ba / mDo
h̄di las tshul khriñs h̄chah̄ bar rtsi ba gan yin no //

佛言、如此經中所說破戒、……：破戒者一闍提、其餘在所一切布施皆可讚歎獲大果報、純陀復問、一闍提者其義云何、佛言、純陀、若有比丘及比丘尼優婆塞優婆夷、發露惡言誹謗正法、造是重業永不改悔心無慚愧、如是等人名爲趣向一闍提道、若犯四重作五逆罪自知定犯如是重事而心初無怖畏慚愧不肯發露、於佛正法永無護惜建立之心、毀皆輕賤言多過咎、如是等人亦名趣向一闍提道、若復說言無佛法僧、如是等人亦名趣向一闍提道、唯除如此一闍提輩、施其餘者一切讚歎、……所言破戒其義云何、……若犯四重及五逆罪誹謗正法、如是等人名爲破戒。

(一切大衆所問品第五·a·b)

④世尊、若一闍提能自改悔、恭敬供養讚歎三寶、施如是人得大果報不、佛

何等人歎一切施、佛告純陀、除一闍提犯戒誹法、歎一切施、純陀白佛、何等名爲一闍提、佛告純陀、若比丘比丘尼優婆塞優婆夷、誹謗經法口說惡言永不改悔於諸經法心無歸依、如是等人向一闍提道、若復衆生犯四重禁作無間罪、不自改悔而無慚恥、彼於正法永無護惜、不與護法之人以爲知識、於諸善事未曾讚歎、若復邪見無佛法僧、我說斯等向一闍提道、除斯等類歎一切施、純陀白佛、何名犯戒、佛告純陀、犯四重禁五無間業誹謗正法。

(隨喜品第十八·879·b)

世尊、若一闍提還生信心悔過三尊、若人施與

……bKaḥ stsal ba / ḥDod chen po ma gtogs bar sbyin pa ni thams cad du bsñags pa yin no // gSor pa / ḥDod chen po ji lta bu lags / bKaḥ stsal ba / dGe slon nam / dGe slon ma ham / dGe bñen nam / dGe bñen ma yañ ruñ ste / Tshig dan pas mdo sde spañs nas physis bzod pa gsol par yañ mi byed pa de lta bu gañ yin pa de ni ḥdod chen Pañi lam du shugs pa yin no // Pham pa bshi byuñ ba rñams dan / mshams med pa lta byed gañ yin pa de dag ni bdag cag ḥjigs pañi gñas su shugs so sñam du ségs kyañ ḥjigs par mi lta la dam pañi chos kyi phyogs kyañ mi ḥpsim / Dam pañi chos dbyuñ ḥo sñam ru ḥbad bar yañ mi byed la / De ḥid kyi bsñags pa ma yin par yañ ḥdod par byed ba de dag kyañ ḥdod chen pañi lam du shugs pa yin no // Sañ rgyas med do // Chos med do dge ḥdan med do shes zer ba gañ yin pa de dag kyañ ḥdod chen pañi lam du shugs pa yin no shes bzzer te / ḥDod chen po de dag ma gtogs par sbyin pa thams cad du bsñags so // …………… bKaḥ stsal ba / Pham pa byed byed pa rñams dan / mTshams med pa lta byed byed pa rñams dan / mDo sde spoñ bar byed pa de ḥid do // (149a~b, 205e~206a)

bCom ldan ḥdas ḥdod chen par lhuñ bar gyur pa las slad kyiḥ gshi gsum la ḥchags par bgyid cin bzod pa gsol par

①佛一彼 ②〔犯戒謗法〕- ③

言、……………彼一闡提亦復如是、
 燒然善根、當於何處而得除罪、善男
 子、若生善心是則不名一闡提也、善
 男子、以是義故、一切所施所得果報
 非無差別。

(一切大衆所問品第五・

425・c) 426・a)

得大果不、佛告純陀、
 ……………彼一闡提亦復
 如是、壞善種子欲令改
 悔生其善心、無有是
 處、是故名爲一闡提
 也、布施持戒得大果者
 果亦不同。
 (隨喜品第十八・897
 ・c)

bygid na / Ci lags ne la sstal yan hbras bu che bar bygur
 lags sam / bKah sstal pa / ……………
 hDod chen pa la yan sa bon med de hDod chen po hchags
 sin bzod pa gsol pah'i sens skyed pa ni mi srid do // De bas
 na hDod chen po de Ita bu la ni thams cad du sbyin pa
 hbras bu che bann yin no // (150a~b, 206a~b)

四十卷本の前十卷、および六卷本、並びにチベット十三卷本の三訳を彼此対照して一闡提についての教説を順次に列挙すれば右のごとくである。いまは三本相互間の異同についての詳細厳密なテキスト批判を検討する余裕がないし、また本論致にその必要を必ずしも認めるものではないから、大異についてはその都度触れることにして、三本を通じて表現されていることがらを大括的に検討しながら、本経における一闡提所説の諸相の問題点を説明することにしよう。

一、先づ最初に気付くことは一闡提に関する所説が經典の或る箇所集中していることである。すなわち、六巻本でいうならば問菩薩品第十七は一闡提品と名づけてもよいほど、その教説に始終している。右の対照表の⑩(以下この番号は対照表の番号を示めず)より④⑥までがそれであり、その品の分量が全分量の一割にも満たないにも拘らず、一闡提の引用が全引用の七割を占めていることによつて肯き得るであろう。そして、そこではこの大乘涅槃經こそが菩提の因であり、これを聞くことによつて菩提心を発し一切の煩惱を滅することができ、四重禁や五無間罪を犯しているところの極重惡の者に対しても本経が菩提の因縁と成り得ること、しかし唯だ一闡提のみは除外される、ということを種々の譬

諭をもつて説いている。

二、一闡提を四重禁、五無間罪を犯す者と明瞭に区別していたことは⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲によつて明らかである。さらに正法を誹謗し毀壞するものとも区別していることが②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩によつて知り得る。^㉞すなわち、一闡提とは、仏教徒によつては極悪とされているところの五逆や誹法のものどもを指すのではないということである。しかも「五逆罪より一闡提にいたるまで」⑩といい、またこれらを併記するのに「四無間と五逆と誹法及び一闡提」という順序で説いているように、一闡提をこれら以下のものと見做しているといえよう。

三、しかるに一方では、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩に説き示めされているように、方等大乗經典の正法を毀謗し、僧を破壊するものを一闡提と名づけている。特に六卷本では「一闡提の輩は何をもつて本となすか、経法を誹謗する不善の業をもつて本となす」⑨とか、魔破句と同様に「正法を毀滅し、僧を破するの相を説くものを名づけて一闡提となす」㉟と明瞭に定言している。同箇所四十卷本やチベット本の説相も勿論同調である。また六卷本の⑤は一闡提が五無間業を^㉟作しているとも解釈し得るし、さらに三本ともに「破戒を一闡提となす。その破戒とは四重禁および五逆罪を犯して正法を誹謗することである」⑩と説いているから、一闡提とは四重禁や五逆を犯すものであると言ひ得る。

四、誹法、五逆以外の者でもあり、また誹法、五逆の者でもある、という右の二問題を如何ように解釈すればよいのか。個々の文々句々にこだわるならば紙背に徹する経説の受容は不可能である。しかし、一闡提に関する諸説をつきあわすことによつて、経説者が目指していた一つの纏まつた見解のある程度引き出すことができる。たとえば、このことに関して「正法を誹謗し、この犯四重禁作五無間罪という重業を造つて、永く改悔せず心に慚愧が無ければ、かくの如き人々を一闡提の道に趣向すると名づける」⑩と説き、一方では「犯四重禁五無間業誹謗正法……尚服法衣而生慚愧……犯四重禁五無間業、深自悔責興護法心」(六卷本 897 b 1c・四十卷本・チベット本も同じ)と説いているように、五逆、誹法者は慚愧して正法に帰依するが、一闡提は慚愧しない、反省をしないといふところに一つの大きな特徴がある。また一闡提

を、無信之人⑥、不可治⑥、必死⑳、燒種㉑、焦種㉒、無目㉓、生盲㉔、大竜毒蛇㉕、鼈㉖、冬氷㉗、不能治④、無因縁㉘などと最悪の形容詞や譬喩をもつて説明している。それは結局「一闍提とは一切の善根を断滅し、一念の善も生じないものである」⑧ということになり、「橋慢にして、悪業に究竟しており、虧損するところがない」⑲、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿」ということであるから、ありとあらゆる一切の悪業を具備したものであると言える。また、⑱、㉘、㉙の説相からいうならば、一闍提を仏教を非難する外道となすことはできない。何故なら、外道と別に一闍提を立てている。

右のようなことを考慮に入れて、経全体の立場から見とおすならば、一闍提とは、四重禁、五逆を犯し、正法を破壊するものであることはもちろんのこと、あらゆる俗世の悪業を具備して、非仏教的な活動をなし、それに執着して涅槃を求めないものであり、しかも永く慚愧しない者であると言えよう。それを一言でいえば断善根者ということになるであろうが、そういう悪人が実際に存在していたかどうかということは疑問である。むしろ、この大乘涅槃経に反対する者、この経典に順がわかない者をそれが外道であれ、小乗であれ、犯戒者であれ、誰であつてもよい、そういうものを単的に一闍提と名づけ、それは五逆、謗法、外道以下の者であつて、諸悪を具備したものでなければならぬという、いわば仮定的な一つの要請から内容づけや性格づけをなしていつたと見るほうが妥当であろう。だからこそ、さきにも一言したように、正法であるこの大乘涅槃経を受け容れ得るや否やということに關して、その否定的な代表者として常に代名詞的に一闍提が説かれているのである。⑩が如来藏経からの引用であり、⑪が法華経からの引用であつて、それらの経典には一闍提については何ら触れていないのにも拘わらず、そこに一闍提を登場せしめているということからしても、そういう経説者の意図を傍証し得るであろう。大乘涅槃経成立時における思想顯現の様態、あるいはそのモメントにおいて、反対者を予想する意識の占める比重の極めて大きいことを知り得るであろう。しかも一闍提をして極悪者として性格づければずける程、かえつて大乘涅槃経の正しさや勝れたことを反顯し得たのである。

五、一切衆生悉有仏性が大乘涅槃経の大命題であることは周知のところである。しかしこの命題を信ぜず、これに反

対する者は到底成仏し得ない、ということが教説として当然説かれなくてはなるまい。一闡提が常にこの問題に関連して説かれているのもそのためである。すなわち「一切衆生にはすべて仏性が有つて、諸煩惱を断じ、無上等正覺を成ずるも、一闡提は除く」⑨とか「一闡提を除いて他の衆生はこの涅槃経を聞法して、皆菩提の因となす」⑭などと説いているのが常例であり、それが基調になつてゐる。しかも⑰、⑱、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟の諸説のように犯四重禁、五無間罪の者は未発心の者であるから、それらは発心せしめ得るといふのは、仏性が有るといふことがその根拠になつてゐる。したがつて、一闡提が発心し得ないといふのは、仏性が無いといふことになる。だから、慚愧しないといふことは、慚愧しないといふその状態が一闡提ではなくて、永久に慚愧することのないそのことが一闡提であるといわなければならぬ。大乘涅槃経を最勝、至善、真正となす立場からするならば、それに反対する者は必ずやかかる者にほかならないといふのである。

六、しかし、大乘仏教精神の昂揚するにしたがつて、いわゆる一仏乘思想が極まるならば、仏性も当然に理念化されなければならぬ。悉有仏性がダルマとして仏教を一貫する真理であるためには、除一闡提といふ論理が成立すること自体がすでに矛盾である。ここにいわゆる闡提成仏の問題が生じてくるのであるが、それは如来藏・仏性思想の展開と並行して派生して来る問題であり、四十巻本の後三十巻本において解決してゐる。先天的ともいふべき仏性と後天的な修行、すなわち性と修という両面からの問題の把え方において、師子吼菩薩品第十一、迦葉菩薩品第十二などにおいて説き明かすのである。すでに学者によつてこの問題が解明されているが、これについては如来藏、仏性思想との関連において十分の検討がなされなくてはならないし、また本論政において取扱つてゐる初型の大乗涅槃経にはこれに対する決定的な解決を与えていないので、これについては他日の攷究に譲りたい。しかし、闡提成仏への藉口がすでに与えられてゐること、しかもこの点において六巻本と四十巻本、チベット本の三本の相異が甚だしいことに注目しておきたい。すなわち、四十巻本に「是の人（一闡提）が、若し仏の正法中に於して心に淨信を得るならば、その時にすなわち一闡

提を滅す、亦若し優婆塞と作り得るならば、一闍提を滅す……」⑦と説いているのは明らかに闍提成仏への足場を与えているものである。しかし六巻本では「一闍提は終日懈怠懶惰でありながら成仏することは有り得ない、たとい法を信じ優婆塞を信じても解脱し得ないのに、況んや尸臥して成仏し得る筈がない……」⑦と全く反対のことを説いて闍提の無仏性を主張している。チベット本でも「正法を信ずるか若しくは優婆塞になつた時に、その人が解脱を滅すると言われることはあり得ない……」⑦とあつて六巻本に同調している。また四十巻本に「若し善心を生ずれば、これ即ち一闍提と名づけず」⑨と説いているのは、一闍提が善心を生ずることを予想しているかの如き説相である。ここでも六巻本やチベット本にはその説の無いことが対照表によつて明きらかであろう。また「一闍提のみ慈心一子想から除かれている」②にも拘らず、四十巻本では悲心一子想を生ずることを説いている②し、チベット本もそれに近い。これは大悲闍提思想への萌芽と言ひ得るであろう。また四十巻本に、「衆生に仏性ありと説くも、一闍提は生死に流転してこれを能く知見せず」⑩と説いていることは、悉有仏性であるから一闍提にも仏性が有るが、それを知見し得ないだけであると解釈し得る余地が残されている。いな、⑩の対照を見るがよい。四十巻本およびチベット本は明瞭に一闍提にも仏性有りと言断している。しかし、六巻本では仏性永絶といつて悉有仏性から一闍提を除外すること実に峻厳である。このように、三本共にその説相を異にする所以は、おそらくさきに一言したように成立の時期を語つていると思われるのであり、先づ六巻本の初型が成立して悉有仏性を唱導しつつも徹底的に一闍提と排除した。しかるに、闍提成仏思想が展開するにしたがつて、四十巻本の後三十巻への連繫上、チベット本あるいは四十巻本に見られるような改訂、増補の筆入が行なわれたのではあるまいか。特に四十巻本はその跡が顕著である。三本彼此対照の結果、一闍提の取扱において可成りの相異のある点を、このように理解することが最も妥当であろう。

大乘涅槃経典における一闍提の諸相については、なお論づべきことが残されているであろう。特に四十巻本の師子吼菩薩品第十一において「善男子、有者凡有三種、一未來有、二現在有、三過去有、一切衆生未來之世、當有阿耨多羅三藐三菩提是名佛

性……………以是義故、我常宣說、一切衆生悉有佛性、乃至一闍提等亦有佛性、一闍提等無有善法、佛性亦善以未來有故、一闍提等悉有佛性、何以故、一闍提等定當得成阿耨多羅三藐三菩提故」(卷二十七、大正十二・524b1c)と結論づけてゆく闍提成仏への論理展開のすじみちについては、四十卷本の増補された部分すなはち後三十卷を整理して他攻を期さなければならぬ。しかし、少なくとも初型と思われる本経の一闍提相については当時の教団相、社会相の反映が著るしく、たしかに正法危機の一面を如実に把えていることを知り得るであろう。本経が扶律を説き談常を宣するのも全くこの一闍提の解決に軸を置いて教説が顕現しているからにはかならない。

五

大乘法界無差別論、究竟一乘宝性論、仏性論、無上依経の一経三論が如来蔵思想大成の中心典籍であることはすでに論じたところである。^④ところで、大乘法界無差別論は偈文を主とした片々たる論であるからそれは別として、他の三本では、はからずも一闍提を採り上げて、如来蔵、仏性思想の論理づけに一翼をになわしめている。もつとも、これら三本は別個のものではなく同一オリヂンから流伝していつたものであると考えられるから、同資料の枠内にあるものとして取扱つてよいだろう。その中、宝性論は梵蔵漢三本が具備しているし、無上依経と仏性論は漢訳本のみしか現存しないのであるから、宝性論を中心に考察を進めてゆき、必要に応じて他の二本を参照することにした。

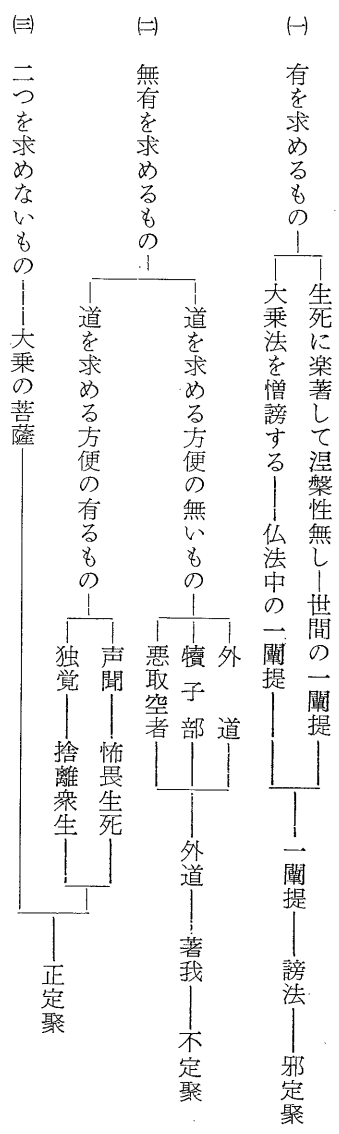
一切衆生有如來藏を十義の面から組織的に説明していることは三本共通である。宝性論ではその第二の如来蔵の因義を明かすところで「常に法の信解と、増上慧(般若)と、三昧と、大悲とが従う」(S. p. 26, T. 91a, C. 828b)^⑤という本偈に対して、釈偈ではこれを釈して「法に対する憎謗と、我見と、生死の苦るしみに対する恐怖と、衆生利益に無關心なこと、四つの障礙があり、その四つは闍提と外道と声聞と独覺であつて、これらに対し信解等の四法が清浄因である」(S. p. 27, T. 91a~b, C. 828c)^⑥と述べている。そして因義の説明の終りに大乘に対する信解が種子であり、般若が仏法を

生ずる母であり、禪定が安楽な胎処であり、慈悲が乳である。これらが諸仏より生ずる子である」(S. p. 29~30, T. 92, b, C. 829b) という当時教団内において一般化していたと思われる有名な偈文を引用して結び、続いて第三の果義を説くところでこれを承けて、かの四顛倒を正義化せしめた常、楽、我、浄の法身の四徳へとたたみ込んでいるのである。無上依経、仏性論においても論理のはこびは同調である。これらのことを判り易く図示してみよう。

(四因)	(四障礙)	(四人)	(偈の譬)	(四徳)
信 法	謗法大乘	一闍提	子	浄
般 若	著我執見	外 道	母	我
三 昧	畏怖生死	声 聞	胎	楽
大 悲	捨離衆生	独 觉	乳	常

かくて、本論では明瞭に一闍提とは大乘の教説を憎み謗るもの、すなわち誹謗正法の徒輩を指しているのである。このことに関し、因の義の釈文のところでいわれる三種衆生論を展開して詳しくその所説を説き明かしているものでそれに耳を傾けてみよう。すなわち一切衆生界中に三種の衆生ありと云つて「一に有 (bhava) を樂す求めるもの、二に無有 (vibhava) を樂す求めるもの、三に二つを求めなうものである。」(S. p. 27 T. 91b, C. 828c) と説くところ。一に有を求めるものとは、このままの生死の世界を欲するもので、これにまた二種類ありといひ、一つは解脱道を違害して般涅槃性の無いもの (aparivivāna-gotta) で、これらは生死輪廻のみを快樂して涅槃を証することを求めないものであり、二つは仏法中にありながら決定位より墮して大乘法を憎み謗るものであると説く。前者が世間の一闍提であり、後者は仏法中の一闍提である。すなわち有を求めるものというのが一闍提なのである。二に無有を求めるものというのが、道を求める方便の無い Caraka, Samkhya, Vaiśeṣika, Nīrgrāhīputra, Parivṛjaka などの外道と、仏法中の犢子部などの有我見のもの、増上慢の悪取空者 (Sūnyatādrīṣṭayās) と、および道を求める方便のある声聞乘にあるものと、独

覺乘にあるものという自利のみで利他行の無いものである。三に両者を求めないものというのが無住処涅槃に住する大乘の菩薩だといふのである。さらにかの央掘魔羅經が一闍提を邪定聚となしたように、三聚論をもつて該当せしめてゆくののである。すなわち、有を求めると一闍提が邪定聚といわれ、無有を求めるとのうち道を求める方便の無い外道や犢子部、空執者が不定聚といわれ、道を求める方便のある声聞、独覺と、両者を求めない大乘の菩薩とが正定聚と呼ばれるといふ。そして、この正定聚の菩薩以外のものにそれぞれ謗法、著我、怖輪廻苦、捨離衆生という四障があるから、仏性を証得せしめ得ないのである。四清淨因によつてそれらの障りを対治することによつて如来家の法王子と成り得ると論ずるのである。いまこの三種衆生論を图示すればつぎのようである。



宝性論などがこの衆生論によつて一闍提をいかに位置づけ内容づけているか一目瞭然たるものがある。生死に執著し、輪廻を欲して涅槃性無きものという世間の一闍提はやはり誹謗正法に起因するものにほかならない。したがつて一闍提とは要するに大乘を誇り憎むものだというのである。大乘涅槃經典において暗々裡にほめかかしていた意図を、宝性論(無上依経、仏性論はもちろん同様である)は判つきりと謗法者と措定したといえよう。それが根本的な障りであ

つて、それなるが故にこそ種々の悪行、執著、違法がなされるのである。大乘法を憎む一闍提が不浄なる輪廻に執着するから、大乘法を信解し修習することによつて浄波羅蜜を証得せしめると果義において論ずるにいたる。では、どうして不般涅槃性の一闍提が浄波羅蜜を得て如来の法王子に成り得るのか、いいかえれば闍提成仏へのすじみちが如何にして立てられるのか。それに答えるのが如来蔵の業義である。すなわち、一闍提は畢竟じて無般涅槃性であると涅槃経に説くが、一方では華嚴経に「邪定聚の衆生等にも如来の日輪の光明が照入し、未来の因を生ずることによつて、彼等に利益を作し、善法を増長せしめる」と説いている。この両説は矛盾するがそれをいかに解決するか、ということの問題として業義において如来蔵、仏性の用らきを論ずるのである。まづ、一闍提にも仏性有りというのが宝性論等の基本的立場である。「性があるが故に、有と涅槃と、前者の苦と後者の楽と、前者の過失と、後者の功德が見られることになる。若し性がなければこれは存しなく」(S. p. 36. T. 97 a. C. 831a)という出所未詳の偈を引用して、一切はすべて如来蔵仏性を因とするに依るのである、仏性を離れては因縁は存在しないから、不般涅槃性の一闍提も因縁によつて菩提心を発すべきである、何故ならば、大乘法を誇る事が一闍提たるの因であつて、そこを縁が無般涅槃性となすのであつて、誇ることを止めしめて大乘法を求めしめんが為に、憎謗を止めた他時を意趣して説かれているのである、と論じている。一闍提説は誹謗大乘心を廻転せしめんが為の無量時に約してのいわば方便示現説法だといふのである。だから更に論を進めて、何人でも自性清浄の仏性が有るから決して畢竟不浄の性質があるといふことはできない、したがつて実は一闍提にも清浄性が有るのである、何となれば、世尊は更に差別なく一切衆生に關して、純浄となり得ることを意図して次のように説いている、といつて、「無始であつてもまた終りを有するものがある。自性清浄は常住であるが、無始の煩惱に覆われていて見られない。恰かも金像が覆われているが如くである」(S. p. 73b. T. 97. C. 0b.)といふ。これまた出所未詳の經説を引用して闍提成仏を論理づけている。仏性論ではこの点が更に明瞭である。すなわち該當箇所「會此三説、一了不了、故不相違、言有性者、是名了説、故仏説若不信樂大乘名一闍提、欲令捨離一闍提心故、説作闍提時決無

解脱、若有衆生有自性清淨永不得解脱者無有是処、故仏觀一切衆生有自性故、後時決得清淨法身」(大正三十一・80c)と論ずるよ
うに謗法無信の状態を一闡提と名づけるだけで、その状態を捨てれば解脱し得るのであつて、一闡提無涅槃性は謗法の
心を捨離せしめんがために仏が説法されたにすぎない不了義説であるといふのである。このことは、仏性論において
は、すでに論の最初において、瑜伽師地論の定無仏性に關するいわゆる五難六答中の第二難答を引用して遂に有仏性を
論証するところで、無仏性論者に泰過と不及の二種過失ありとし、無涅槃性の經文の意義を明かすところでも明瞭に
論じているところである。⑧ともかく、宝性論等においては悉有仏性という如来藏思想の根本義に關連して、一闡提がと
りあげられ、それを謗法大乘となすことによつて大乘涅槃經の意図を一步前進せしめると共に、如来藏の根據、本質、
あり方の説明において矛盾なく一闡提を解決し、また当時の大乗仏教思想の宣布に力をつくしたものといえる。また一
面からするならば、当時いかに大乘仏教護法の意識が強烈であつたかを想像することができよう。なお四十卷本涅槃經
の後三十卷における闡提成仏説もあるいはこれらの論の影響によるところが大であつたのではないかと考えられるが、
それについてはさきにも一言したように仏性思想の展開の考究と共に他致を俟ちたい。

次に *Lankāvatāra-Sūtra* の *Sattī-nīśāsāhara-sarvadharmamuccaya* において、すなわち漢訳の七卷本というならば
集一切法品において、断善根闡提と大悲闡提の二種闡提説を立てていることは有名なところである。菩薩藏たる大乘法
を謗るものを一切善根を焚焼し悉断した一闡提と名づけると共に、無始衆生の爲に願を起し、一切衆生を憐愍して彼等
が悉く入涅槃するまでは終に涅槃しないという菩薩の本願によるいわば衆生無辺誓願度の無涅槃種性相を一闡提と名づ
けるのである。前者は断善根といつても、諸仏善知識に値偶せば如来の威神力によつて善根菩提心を生ずるのであつ
て、大乘法を謗つている時の状態を一闡提というにすぎない。したがつて畢竟不成仏の闡提は後者であるが、これはい
うまでもなく大乘仏教精神の極みを発現したものであつて、一闡提の眞の意味を大きく転換せしめたところにこの經説
の思想的意義を認めなくてはならない。また四十卷本涅槃經の卷十六に説く「善男子、譬如父母所愛之子捨而終亡、父母愁

願與併命、菩薩亦爾、見一闍提墮於地獄、亦願與俱生地獄中、何以故、是一闍提若受苦時、或生一念改悔之心、我即當為說種種法、令彼得生一念善根、是故此地復名一子」(大正十二・459a)の思想を發展せしめたものであるかもしれないが、畢竟無性有情であるという一闍提を解決するのに菩薩の大悲願と結びつけた発想法は驚嘆に値するといわなければならない。

また *Sūtrānakāra* の *Gotrāhikāra* ②には、すなわち大乘莊嚴經論種姓品第四③には、一闍提の語は無いが無般涅槃法の種性として、期間中のものと、畢竟のものとの二種性に分類していること、しかもその説明が涅槃經や宝性論の闍提説と相通するものであることは十分注目しておかなくてはなるまい。

そのほか、一闍提説を経論にみることはできない。ただ中国選述經典といわれる金剛三昧經や大仏頂首楞嚴經④に部分的に説かれているのみである。

六

一闍提についてなお論じなければならぬ面を未だ多く残している。ここでは一闍提の語義を考究し、それが大乘涅槃經によつてとりあげられるにいたる思想史的背景を探り、涅槃經における諸相を羅列してその意義を求め、さらに宝性論などにおける展開を究明したにすぎない。しかし、これによつて、インドにおける仏教思想において一闍提登場の意義が奈辺にあつたか、そしてその規定が魔破句、断善根、現世主義者、犯戒者、無慚愧者、外道、誹謗大乘者などといういろいろに移り遷つていなくてもその狙いは一つであるが、それがどこにあつたか、また教団内の事情をいかように反映しているか、さらに仏教の究極原理である如来藏、仏性との関連においていかに解決されているか、等々の問題について相当程度の解明が与えられたものと思う。なおしかし、それにしてもアンチ仏教徒を觀念的に思想化し教理の枠内に吸叫しているために、そこから具体的なものを引き出すにはあまりにも複雑多様であるが故に、組織的に分析し理解することは困難であつた。また、中国や日本仏教における一闍提無仏性思想の宗教的解決すなわち道元に代表されるよ

うな禪的論理、善導によつて代表されるような浄土教的契機については稿を改めて論じつゝさなければならぬ。特に浄土教との関連については、大無量寿経第十八願に「唯除五逆誹謗正法」と説き、観無量寿経では下三品の機を説くにあたつて「多造衆惡、無有慚愧」「五逆十惡、具諸不善」と説き、さらに善導が觀經疏に「一切の凡聖の身の上において、十惡、五逆、四重、謗法、闡提、破戒、破見等の罪を作つて……」、法事讃に「仏の願力を以て五逆と十惡との罪滅して生を得せしむ、謗法と闡提も廻心すれば皆住く」と論じていることなど、まさに仏法内にある主体的な自己の問題として深く攷究しなければならぬ重要な課題である。それらに備えてのいわば基礎的作業が本論攷だつたのである。ともかく、インドにおける一闡提説を根本的に解明することによつて、正法宣流の仏教の過去の歩みと、その内部事情を如実に把握する一つの手掛かりを得たであらうし、さらにそれが現代の仏教諸問題に対してもすぐれた指針を与えてくれるものであることを提起してひとまづ稿を閉じたい。

(昭和36・10・30)

註① 拙稿「大乘涅槃經典群にあらわれたる危機思想」仏教大学研究紀要第三十七号

同 「仏教における危機意識の一考察——特に大乘涅槃經典群の成立を繞つて——」印度学仏教学研究第八卷第二号

② この問題に関しては常盤大定「仏性の研究」(昭和五年四月、丙午出版社刊)に詳しく論考されている。

③ An Index to the Lankavatara Sutra, by Daisei Teitaro Suzuki, Kyoto 1934, p. 45. 中村瑞隆「宝性論の梵漢对照」五四頁以下。

④ 哲学大辞書(明治四十五年、同文館) p. 108 a～p. 109 a 「一闡底迦」の項参照。

⑤ 仏教大辞彙(大正三年、仏教大学編)第一卷 p. 219 a～p. 220 c 「一闡提」の項参照。なおそのほか、松本文三郎「涅槃經論(統)」(宗教研究第二年第七号)、土橋秀高「性と修の問題——涅槃經に於ける展開——」(仏教学研究第七号)など参照。

⑥ 例えば、M. N. 27, vol. I, pp. 183～184, 39, p. 279, D. N. 4, vol. I, p. 124, 中阿含經卷三十六(大正一・658 a)、同卷五十六(大正一・778 b)

⑦ 卷二十三(正三五・一)

⑧ 望月仏教大辞典(昭和三十年、世界聖典刊行会刊)第一卷 p. 148 c～p. 149 c 「一闡提」の項参照。

- ⑨ Ratnagotravibhāga や Lankavatārasūtra のチベット本を対照するまでもなく、Mahāvīṃṣīpatti (楠本) No. 2210, 2223 など
 の明をひかへぬ。
- ⑩ 光明遍照高貴徳王菩薩品 (大正十二・519 a ~ b)
- ⑪ Lankāvatāra Sūtra (Nanjio Edition), Sattvīṃśatsāhasarasarvadharmasamuccaya p. 65
- ⑫ 卷二、集一切法品 (大正十六・597 c)
- ⑬ 卷二、仏法品 (大正十六・527 b ~ c)
- ⑭ 卷一、一切仏語心品 (大正十六・487 b)
- ⑮ 註⑨参照。
- ⑯ 大正四十三・610 c ~ 611 a
- ⑰ 卷三、本事分中成就品第五 (大正三十一・673 c)
- ⑱ 註⑦参照。
- ⑲ Ibid. 註⑩参照。
- ⑳ 望月仏教大辞典第一巻 p. 35 c 参照。
- ㉑ 仏伝については一々典拠を挙げるまでもなく、梵巴藏漢の多くの經典や律典に記載されているところであり、それらを集成した多くの仏伝が著わされていることもまた周知のところである。
- ㉒ 大毘婆沙論卷九十九 (大正二十七・510 c)、異部宗輪論 (藏漢和三訳対照寺本本、五頁)。
- ㉓ Dīpa-vaṃśa IV, pp. 30
- ㉔ 望月仏教大辞典第五巻 p. 4720 b 参照。
- ㉕ 例えば長阿含經卷二十初利天品、過去現在因果經卷三、瑜伽師地論卷四、
- ㉖ 例えば方広大莊嚴經卷七、卷九、雜阿含經卷三十九、長阿含經卷二、Vinaya-piṭaka I. p. 20, S. N. 35. 199, IV. p. 177
- ㉗ 望月仏教大辞典第五巻 p. 4201 b 参照。
- ㉘ 大正二・58 c そのほか中阿含經卷五、六羅魔經 (大正一・778 a)、起世經卷五 (大正一・337 c)、増一阿含經卷二十六 (大正二・629 c ff.)、雜阿含經卷三 (大正二・15 b ff.) などにもみられる。
- ㉙ 大正二・699 b

- ②⑩ 大正三・769c
- ③① 大正二・284b ff.
- ③② 大正二・827a、大正二五・39b、大正三三・447c
- ③③ 離世間品 (大正九・663a)
- ③④ 例えば仏母出生三法藏般若波羅蜜多經卷十九 (大正八・662c)、同經卷十二 (大正八・628a)、道行般若經卷七 (大正八・460a)
- ③⑤ 大品般若經卷四十四 (大正五・250a)
- ③⑥ 大正二五・99b
- ③⑦ 大正二五・633c
- ③⑧ 四十卷本如來性品第四 (大正二一・393b)
- ③⑨ 分別業品第四之五 (大正二九・89a)
- ④① 大正二一・184c
- ④② 邪見品 (大正二一・318c)
- ④③ 大正十・272b
- ④④ 大正二一・220c
- ④⑤ 例えば俱舍論卷十八分別業品第四之六 (大正二九・93c~94a)
- ④⑥ 卷四 (大正九・332c ff.)。この經典と大乘涅槃經との成立史的關係については問題があるが、ともかくこういう五逆を説いてゐることは注目すべきであらう。
- ④⑦ 分別業品第三之三卷十 (大正二九・56c)
- ④⑧ 卷八十四 (大正二五・649c)
- ④⑨ 例えば華嚴經卷二十六十地品、卷三十二如來性起品、如來莊嚴智慧光明入一切仏境界經、十地經論卷十一、華嚴經探玄記卷三、釈摩訶衍論卷一。
- ④⑩ 拙稿「機根名義攷」(仏教文化研究第五号)参照。
- ⑤① 拙稿「Dhāru ㄱ Gotra」(仏教文化研究紀要第三十六号)参照。

51) 大正二・529c。この經典も大乘涅槃經との成立史的關係については問題のあるところであるが、ほと同時代の成立とみて差支えあるもの。

52) D. N. III Saṅgīti-suttanta p. 207

53) 大毘婆沙論卷百二十一「由_レ她故者、謂生_三達梨蔑戾車中諸有情類、其性愚鄙多造_三惡業_一」(大正二十七・631a)、同卷百八十三「其無法者生_三在達梨蔑戾車中、性皆頑露憎_レ賤佛法_一相与合縱、從_レ西侵食漸入_三印度_一轉至_三東方_一」(大正二十七・918a)、大宝積經卷九十優波離會「所作罪障、或有覆藏、或不覆藏、應墮地獄餓鬼畜生、諸余惡趣辺地下賤及蔑戾車、如是等処所」(大正十一・516a)などと説くのがそれである。

54) 大正十六・467c

55) 前掲拙稿「大乘涅槃經典群にあらわれたる危機思想」(仏教大学研究紀要第三十七号)参照。

56) 後漢訳といわれる修行本起經(大正三・464b)に五濁思想のあることがこれに関連して注目される。

57) 註①参照。

58) 前掲常盤大定「仏性の研究」四十頁以下参照。

59) 前掲註55拙稿「三、大乘涅槃經典群の資料的整理」

60) 梵文フラグメントには一闡提に関する部分がない。しかしチベット十三卷本は梵本からの訳出であるから原典の反映が著しい。

61) ②、③については三本の所説が異なっており、六卷本の意味不明瞭であるが、四十卷本とチベット本から、謗法者と闡提の區別を知り得る。また⑬は六卷本とチベット本が謗法者と闡提を区別している。

62) 第三節で引用した仏本行集經の「無慚愧心」の注目が茲に関連してくるのである。

63) 前掲常盤大定「仏性の研究」。

64) 拙著「如来藏思想史」(昭和三十二年・仏教大学刊)十七頁以下参照。

65) これについての詳しい考証は別改を期したいが、前掲拙著七十頁以下に簡単にこの問題に触れている。

66) S. 4 The Ratnagotravibhāga Mahāyānoṭtaraśāstra, Edited by E. H. Johnston, D. Litt, Patna, 1950 の梵本出版本を指し、D. は此京版影印本卷百八の所収本、C. は漢訳本大正藏經卷三十一を指す。以下同じ。

67) 無上依經卷上では「阿難、有四種惑障菩提果、何者為四、一者棄背大乘法、二者邪執我見、三者畏生死苦、四者不行利益他衆

- 生事」(大正十六・471a)と説き、仏性論卷二には「四障者、一憎背大乘、二身見計執、三怖畏生死、四不樂觀利益他事、初障闡提、二障外道、三障声聞、四障独覺、由此四惑、能令四人不能得見自性清淨法身」(大正三十一、797a)と論じている。宇井伯壽「宝性論研究」一三八頁には、この偈文を大乘莊嚴經論梵本四・一一からの引用であろうとしているが、十住毘婆沙論(大正二十六・25b~c)にもこれの先驅になるような思想がある。
- 69 宝性論、仏性論はこの箇所において、かの不増不减經(註54)の文を引用して聖數量となしている。
- 70 無上依縁や仏性論は外道として九十六種の数を挙げている。
- 71 註55参照。
- 72 經名を記していないが、この説は当然大乘涅槃經でなければならぬと思う。
- 73 華嚴經性起品(大正九・616b)、同一の文が如来莊嚴智慧光明入一切仏境界經(大正十二・242c)にもある。
- 74 卷一破執分第二中破小乘執品第一、(大正三十一・787c~788c)
- 75 卷六十七撰決択分中声聞地之一(大正三十・669b ff.) 顯揚聖教論卷二十撰勝決択品(大正三十・581a)
- 76 仏性論の所説はいうまでもなく真諦の思想が可成り入っているから、この箇所はあるいは真諦の所説とみるべきかもしれない。
- 77 前掲註① Nanjio Text p. 65.
- 78 前掲註② (大正十六・597c)
- 79 *Asaṅga, Mahāvāna-sūtrāṅkāra*, by S. Lévi, 1907, pp. 12~13.
- 80 大乘莊嚴經論卷一「已広分別性位、次分別無性位、偈曰、一向行惡行 普斷諸白法 無有解脫分 善少亦無因 釈曰、無般涅槃法者、是無性位、此略有二種、一者時辺般涅槃法、二者畢竟無涅槃法、時辺般涅槃法者有四種人、一者一向行惡行、二者普斷諸善法、三者無解脫分善根、四者善根不具足、畢竟無涅槃法者無因故、彼無般涅槃性、此謂但求生死不樂涅槃人、已說無性」(大正三十一・595a~b)とある。梵本も殆んど同じである。なおその和訳は宇井伯壽「大乘莊嚴經論研究」七七~七八頁参照。
- 81 金剛三昧經真性空品第六(大正九・371a)、大仏頂首楞嚴經卷六(大正十九・132c)

